

伊賀越道中雙六

近松 半二
作 者
近松 加作

○第一 鶴が岡の段

大權聖者の未來記に書記したる四海の治亂元弘の戦ひ一統に切まづ
めたる足利氏草もゆるがぬ鎌倉山頃の大永元年二月上旬鶴が岡の奉
幣に勅使下着の知らせよよつて山の内の執權上杉顯定警衛の役目承
り坂本は假屋をえつらい一日かゝりの家中の守護和田行家が一子志
津馬威義嚴重に守り居る折節佐々木丹右衛門非番の姿上取て下を憐
む羽二重侍假屋に來かゝり志津馬殿當日のお役目苦勞と挨拶し別
して今日の勅使は入の日なれば取分て大切の番随分鹿末のない様
よ、とすも此丹右衛門貴殿の親父行家殿は劍術の門弟是迄外の弟子よ
りも格別な差圖下されし師匠の恩山よりも高けれ、其は子息の
志津馬殿次第に立身も有様と神に心願を込奉り祈る程の拙者が心底

日頃から齒^は又絹着^{きぬぎ}せすすを、必氣^き又いさへられな、貴殿^{きでん}の疵^{きず}は酒參^{しゅさん}と万事^{ばんじ}を忘れ^{わす}さつえやる、色^{いろ}と酒^{しゅ}をバ敵^{かたき}とせよとい賢者^{けんしや}の禁^いめ、常^{じょう}も此義^{しぎ}をお忘れ有^あと眞實^{しんじつ}あまる、異見^{いけん}也^な、忝^{かたじけなく}いおえめし、兼^{かつ}親共^{おやども}がやまも、劍術^{けんじゆつ}の高弟^{かうてい}といひ、若^{わか}けれ共實義^{じつぎ}有^あ丹右衛門殿^{たんゑもんでん}、兄弟^{けいだい}同前^{どうぜん}も、万端^{ばんたん}を相談^{さうだん}致^{いた}せとす付置^{つけお}れたれば、其元様^{そのもとさま}を兄^{あに}と思^{おも}ふて居^ゐますする、イヤそふ請^こて下^{くだ}されバ、拙者^{せつしや}の何^{なん}より甚祝^{はるにだしうちやく}着^{やく}、弟子^{でし}傍輩^{ぼうはい}の事^{こと}をすいかいなれども、氣^きの救^{いさな}されぬ男^{おとこ}の、澤井股五郎^{さわいぶごろう}、彼^{かれ}が從弟^{いぞこ}城五郎^{じやうごろう}の、鎌倉殿^{かまくらでん}の昵近^{ぢつきん}衆^{しゆ}、直人^{ちゆうじん}を一家^{いけ}又持^もたど鼻^{はな}かけ、は前の勤^{おつとこ}も疎^そあして、晝夜^{ちゆうや}遊所^{ゆうじよ}又入込^{いりこ}由^{よし}必^{かならず}彼^{かれ}を友^{とも}又なされな、昨日^{けふ}の拙者^{せつしや}が番^{ばん}、今日^{けふ}の非番^{ひばん}なれ共内證^{ないしやう}ながら、見廻^{みまわ}りも致^{いた}さふと存^{ぞん}じて推參^{すいさん}致^{いた}した、勅使^{てうし}のお入^{いり}又間^まも有^あまじ、別當^{べつだう}へ參^{まゐ}て配膳^{はいぜん}の、勝手^{かて}の案内^{案内}見て參^{まゐ}らふ、後刻^{こうこく}くど別^{べつ}れ行^ゆ、折^せからうそく來^きかゝる町人^{ちやうじん}、番人^{ばんじん}聲^{こゑ}かけ、くどこへ行^ゆ、は飯屋^{いひや}の前^{まえ}、すさりおらふと口^{くち}く又嘴^{くちばし}付^つ

られて犬つくばい、^{ア、イヤ}私の切通しの町人、本庄屋定七とやらして、和田のお家へお出入の者、志津馬様も用事有てと、聞より志津馬、苦しうない、是へ参れと傍近く、今日の勅使は入の社内故、一々人を改る、急用か、何事ぞ、^{イヤ}別義でもござりませぬ、彼金子の義を、^{コリヤ}家來共其方共の南門へ参つて人を通すな、残らずいけと追やれば、いか様金銀の事、内證爰でやの不調法、^{イヤ}契約の日が延引すれば無理と思ひぬ、此事は股五郎殿を頼んで置た、一兩日猶豫を頼ど、咄し半へ大小も、金拵へのつかつかど、入來る澤井股五郎人を、非も見ろのさ、顔、^ア定七、お手前が來た筋、股五郎が吞込でゐる部屋住の志津馬殿、吉原通ひの内證金、今用立て置たれば、兼てお身が願ふてゐる、お國の掛屋も仕てやるさ、時と志津馬、頼が有、身が懇意にする町人の女房、今日勅使のお入を聞て、都人の装束姿拜見させて下されと、據なく願ふ付、裏門からこつそりと、最前

社内へ入いて置おいた、爰すに粹すな貴殿きでんなれば、大目おほめに見みてくれまいか、どふじや
〜、町人まちどたる者殊ことに女左様おんなざやの事を政道せいどうする志津馬しづまが役目やくめ、外の者
の見ぬ中みぬちうに、一時も早く追歸おどろされよ、そふ堅かたふ云いた物ものぞやあいわい、こ
貴様きさまの好すきの女おんなだわい、ちよとい女房にようばう見みたがよい器量きりやうのどてん天人てんてん
娶あま天降あまくだしてお目めよかけふ、爰すぞや〜と手招まねきよ下お來りる坂さかの段だんかづき、
屋敷やしきか町まちと三重みえの帶おび、堅かたふ見みせてもえとけなく、志津馬しづま様さまわしじやわい
なと、被かを取とり松葉屋まつばやの、瀬川せがわぞやあいかと志津馬しづまが胸むねに、股五郎またごろうの
粹すでないか、何か一日逢あねば百日ひゃくにちと、吸付すいづき合あふてゐる中うち、身共みどもとい違ちがふ
て親持おやもちの身分身分、此間こゝに御前ごぜん勤しんと問とがなふて廊くろわへ來きぬを女氣おんなきで若もや心替こころか
りかと案あんじるが可か愛あいさふ手工てしう合あしてけふの參會さんかいよもや腹はらも立たまいが、
こ太夫お太夫嬉うれしいか、遠慮えんりよなしよ、えげれ〜と突つやられてひんどすね、
女中おんな法度はつどの此こゝお飯屋いはんや追おいあせどおつちやつたわ、よく〜わたしがお

嫌きらひそふなど、思おもひせぶりの雪の梅解どけぬまかけがそれしやなり、イヤそふ
でいなければ、是こゝに又きつい所へ、連つれて來た、此門このかどに誰が通したぞ、イヤ此實じつ
内うちめでござります、スヤは門を通したの儻たうか、まつくいやつ、どいふ物
のおれも顔が見たかつた、とふからそふ碎くだければよい堅かたい顔が氣きよ
くいぬ、家來共うちどもに散ちて仕廻しまふた、實内じつうちに志津馬の腰付こしつけ廊のわの供する粹奴すいやつとこ
ふ寄よた所ところにとんと廊の座敷ざしきに成た、太夫主ねしのおもたせ是へナと返事こたへに奴
の遣手やりて、時繪ときえの提重さげ、角樽かくづのに股様またさま々の見舞みまひ、吉彌よしなたべこアイと跡引あとひき長烟管ながきび
包つつみほどいて取出とす、裾姿立木すそかぜすがたたちの櫻さくらあたり、まぱゆく見へよける、先一獻いっこんと
股五郎大盃引受こごろうだいはいりうけて、志津馬慮外しづまろぐわいす、イヤ今日けふに大禁酒だいきんしゅじや、といふてあの
君が顔見おもてて吞のずよに居られまい、ちよつと一ッいっ身の養生やうじやうのめ吞のバ甘露かんろの菊
の酒、其盃定そのはいさだ七しち差召さしめれ、大事な一ッ吞いっのやれ、扱盃さつかを差さて置おて、お手前てまえに頼
事別義ことべつぎでない、此瀬川このせがわと此通りこのとおりに深ふ云いかした中、所ところに去大家きだいがから

身請の相談、向ふに千兩二千兩惜まぬ家柄、欲に喰付親方が其方へやらふといふを、先約なれば志津馬が方へ、五百兩で身受さすると、此股五郎がつくばつて置たれど、けふ翌に迫つた日切、これ迄取かへも有上なれば、用立てくれまいか、イそりやはやあなた方のお頼、いかもと申たけれど、部屋住の志津馬様、慥な引當がなければ、夫も思案仕て置た、和田家の重寶正宗の名作を質物に差入る、是程慥な引當はない、イヤ、股五郎殿、其刀の先祖を傳へつて、常の差料に致さぬ重寶質物に入る事、扱悪い合點、其大切な刀じやよつて書入て間合すのさ、金さへ濟せばきよじない、殊に此度武將の若君は元腹の祝儀、諸大名の名作の劔献上有べき折から、正宗多き中にも和田の正宗に勝れて無双の名作、殿は所望有に必定、其時よなければならぬ大事の刀、しばらくの用も立、其中に股五郎が工面して取返す、氣遣ひせずと、志津馬、其趣一札

書てお渡しなされと、色も付入正宗を、仕てやる心の劔と、白紙取て認
る、若氣の思案ど是非もなき、定七證文懷中し、そんなら金子調達致し、股
様方迄持參、致さふ質物の結構なれど所詮こつちの物、いならぬ、返
濟の違ひぬ様、氣遣ひするな、身が一門の歴、金銀澤井が吞込だ、よ
ざりますが、云ぬ事の聞へぬ、利銀の二割三月おどりでござりますと、
欲の鵬股五郎、詞番ふて立歸る、祝ふて是から祝言、天下晴ての志
津馬が奥方、目出たい、打て置しやん、調子も乗て最一、大事か二
つも三つもいつの間、酔が廻つて役目の大事忘れるめれん、仕てや
つた、笑壺も入たる股五郎、仲人の酔の紛れ、積る咄しをゆるりと瀬川、
暫く粹を通そふど、跡は難義を掛作、廊下へぬけて行共えらず、股主、
どれへござつた、ぬけそとの手が悪い、人をころりと殺して置て、逃ふと
い卑怯者、此様な嬉しい中、殺すの死のと氣よかゝる事計、そんな

らふれど祝言するが、そなたの眞實嬉しいか、と有^あべ我等も千萬祝^{しちやう}着^{ちやく}此
悦^{えつ}び又一つ、中其様は酒上つたらは用とやらの害^{がい}なるもふ此
盃^{さかづき}の止^{とど}めせふ、止^{とど}めせふとの祝言がいやか、いやでなくばま一獻^{いっけん}たとへ
知行召上られ、ふちの瀬川は成とても二人手^{ふたり}は手を引^ひ合ふて、どんな川
へも芝津馬の木望^{きぼう}もう主も親も入^いぬ殺せ〜と醉^{すい}狂^{けふ}も物がいのする、
くだ枕^{ひざ}膝^{ひざ}またわいもなき折から、勅使^{ちやくし}のお入と呼^よひる聲^{こゑ}、聞^きとひとしく
丹右衛門、志津馬のいかよどかけ付^つれ、南無三寶例^{なんぶさんぼうれい}の沉醉^{ちんすい}、志津馬殿
く、コレイナ太夫^{たふ}を待^{まち}して置^おてあの様は寝^ねてじやないなこそくりおこ
そと二人^{ふたり}して抱^か起^たしても、どろ〜目^め志津馬、正氣^{せいき}を付^つやれ勅使^{ちやくし}のお
入^いじや、猪口^{ちやくぐち}の嫌^{きら}ひ、こつぷで致^{いた}さふ、何いふても死人^{しにん}同前^{どうぜん}、一世^{いっせい}の浮^う
沈^{しん}何とせん、家來共此女裏門^{からいどもこのにりもん}から追^おかへせと、替^か上下^{かたさか}の肩衣^{かたぎぬ}を身^み引^ひか
けて志津馬が代^かり勅使^{ちやくし}を、出迎^{でむか}ふ深切^{しんせつ}も夢^ゆも白川高郎^{しらかわたかろう}松吹風^{まつふきふう}も音添^{おとぞえ}

て、後の難義きんぎと和田の家世の成行こそ「定めなや

○第二 行家屋敷の段

春毎はるごとも、詠よめめぬ飽あかぬ鎌倉山、仁義を守る武士も、旦あしたも隠す桐きりが谷やう、和田行家が一構へ書院先の鎗水も、打手うちでも靡なびく姫仲間塵取役や掃除番そうじばん、其役々を割付て、一つ所へ寄たかり、何なんと玉木どふ思やる、今鎌倉のお屋敷でいどの若旦那がよい男、ア、コレおきや、逆も男を吟味しても生物いれの入れぬ、乾物かんぶつで仕廻しまふておきや、生物をたべ過すすとお谷様がよい手本親の赦さぬ徒いたづらと親殿様の勘當、毎日くお詫言わがやふは出なさるゝ、おいどしい事でないか、退付お越なされたらそなたの部家べかも置まして置てたも思ひね咄はなしで隙入た、必晩の宿下りも、仮寐かりねの床のふつてりと、握にぎりてたへのあるのを、土産みやげも頼むと打笑ふ、一間の襖明暮も、血を分わけ子と血を分わけ、義理のかつらよからまれて、柴垣一間を立出たちて、何をさない、ぬ

共掃除仕廻へ勝手へ行お谷殿を是へ呼や、必かならず目立ぬ様もど有ければ
いと答へて、ぬ共皆みな勝手へ入いけり、けふも又何いひと言寄方よるかたもなく、詫わま
お谷が綱切てまほくとして座ま直ただる、心こころがらとい言ながら、我内われうちな
ら人目を忍しのび、夫そと又付添女よの道政右衛門事こと、我夫のお氣いきも入あつ、天晴たれの
達人たつじん、なればけふや殿へは目見へ願ねがはん翌あすや取次とりぎせん物と思し召めしたも
恩が仇、そなたが連つれて立退のきし、不届とどき者と、は勘當かんたう、自が身みも成てたも、
世繼と定さだめるあの志津馬傾城狂きやうひは身みを持崩もちくづし、万一は沙汰有て、いと
前勤ぜんきんの願ねがひをさげしも、我子わがこを思ふ夫のお情なさけ、世間の取沙汰口惜くちやくく、繼子けいし
繼母けいぼの隔へだて有柴垣てあきとばし思やんなど、夫おつと又隨したがふ貞女ていじよの道、言聞きこされて差さし
つむきとかふ詞こともなかりしが、漸しだし顔かほを上あ、何なんとぞ今一度父上ちちあのお赦さし
有あお詞ことを、お願ねがひなされて下くださりませ、其事は氣遣きぢひ有な、一旦夫婦と
成たれば世間よを守るが男おとこの役適あつたれの侍さむらいを埋うれ木きとなさん様もなし、命いのちも

過分、^{イヤ}先生存じたまりの顔色も宜しく、珍重も存じます、扱今日参つた
の密々もお咄しやたき事有て、や奥方と冷るよお蒲團上られいと、いふ
を立端も柴垣の、必共燭臺持といよくと立て行、股五郎摺寄てお咄し
とやの別義でござらぬ、兼て貴公の家と手前どの一家同前、殊も拙者劔
術のお世話も預りし先生、心腹を打割てお咄し合致す中、貴公様も同
前、そこを存じて、内分めてや上ふと存じ参上致してござる、是のくお
互もは懇意も致すから、何事よろらず承りたい、は遠慮なふお咄し
なされ、別義でもござらぬが、正宗の刀私も譲り下さるまいかなと
思ひがけなき一言も、返答なけれは、斯やた計での合點参るまじ、か
うでござる、正宗の刀の質物も入てござる、个様やせば、志津馬殿の事訴
人致す様なれど、譯をやさぬと合點が参るまじ、惡ふござるく、吉原
の瀬川とや遊女も迷ひ、正宗の刀を質も入身請の相談極りしと承る、

どくも拙者存じたなら、異見でも仕らんと存じた所が跡の祭り、
スリヤ正宗の刀、他家の物も成まする、そこを存じて、拙者方へ申請れば、貴
公なり、手前なり、兩家も有も同前、内談どの此義でござるど、お爲さか
し、云廻す、心の内ぞ恐ろし、コレハ日頃、懇意も致す間、斡めが不屈、
世話下さる段、コレハ手を突てお禮申、千万忝ふ存じます、扱ふ不屈な斡め
ヤ此お世話は無用、なさつて下され、コレハなせでござる、右の刀、則私方
ヘ請戻してござる、スリヤ正宗の刀、請戻したとな、夫、重疊、シテ志津馬殿、
な、勘當致した、若、今様の義沙汰有て、万一殿様より尋、預、し時、譯な
いと存るから、右の刀を請戻し、沙汰なき中、斡め、勘當致した、ハ、氣の
毒、千万、時、外、お頼、うたい、私、未、獨身、で、あり、ます、る、が、どう、ぞ、姉、の
お、谷、殿、を、拙、者、が、妻、も、下、さ、る、まい、か、スリヤ、鐙、の、子、也、行、家、殿、の、家、督、拙、者、が
預、り、其、内、の、志、津、馬、殿、お、心、も、定、り、な、べ、に、渡、し、の、相、違、な、し、是、非、お、谷

殿を申請^{うけ}たい、此は相談いどふでござるな、^{イヤ}は深切^{しんせつ}忝^{かたじけなく}が、其お谷めが事
い唐木政左衛門と申浪人と密^{みつ}通^{つう}致^ちし、家出したの四年以前、个様の不屈
者なれば、勿^も論^{ろん}てやつい七生迄の勘當、貴公も此義のゆさいでもよくは
存^{あり}じで有ながら、何かこりやは座^ざ興^{けう}でござるのと、何をいふても請^{うけ}付^{つけ}ぬ、
始めの耻^ち辱^{じよく}は股五郎、何がな見出し、付^{つけ}込^こんと、白眼^{にらみ}廻^{まわ}せば立聞お谷三人
一度は見合す顔、立^{たて}切^{きり}障^{さや}子^こ驚^{おどろ}く行家^{ごうか}、^{コリヤ}悪^{わる}い、今爰へ出ると身が武士
が立ぬ、屋敷は叶^かいぬ出てうせいと、追出して置^{おき}ましたと、云^い紛^{まぎ}らせば高
笑^{わら}ひ、^{コリヤ}行家^{ごうか}殿何い、いつゑやる、娘やるとあらぬからいやで濟事^{じき}、^{コリヤ}
手前小身者と侮^{あは}れり嘲^{てう}哂^{ちう}召^めるの、耻^ち辱^{じよく}を與^{あた}へるのか、股五郎は武士でござ
るぞや、侍でござる、娘は勘當致した、屋敷は居る物を追出したの勘當の
と、貴公殿の名代は一家中を納る役で、いなか、それで家^か老^{ろう}職^{しやく}とい
れますか、志津馬を勘當仕たといふ偽^{いつは}り、是も屋敷は隠して置、正宗の

刀貴公が質入^{いれ}たで有と、惡口^{あくぐち}雜言^{ざごん}出^でほうだい、こたへ兼^りて膝立^{ひざだち}直^{ただ}し、慮^り外^{がい}なり股五郎^{またごろう}、儕^せが親^{おや}又左衛門^{さゑもん}の身共^{みども}より上座^{じやうざ}の家筋^{けすぢ}、其^{その}斡^{やく}と思^{おも}へばこそ、劔術^{けんじゆつ}の弟子^{でし}ながら禮義^{れぎ}を以^{もつ}てあしらへば、伸上^{のびあが}る法外^{はふがい}者^{もの}、心得^{こころえ}ぬやつと思^{おも}へ共、何とぞしてため直^{ただ}し、親^{おや}の跡目^{あとめ}を繼^{つぎ}せてやりたさ、鎗^{やぐら}の一手^{ひとて}も教^{おし}てくれた、師^しの恩^{おん}を打忘^{うわす}れ、斡志津馬^{やくしづま}をそゝり上^あて遊所^{ゆじよ}へ連行^{つれ}、正宗^{まさむね}の刀^やを質^{いれ}入^{いれ}させ奪取^{だつしゆ}て、それを落度^{らくど}と我家^{わがや}を滅亡^{めつぼう}させんと、よくも工^{たく}んだ人^{ひと}非人^{ひにん}め、こりや儕^せが智惠^{ちゑ}計^{けい}でない、正宗^{まさむね}の刀^やと望^{のぞ}をかけ、頼^{たの}んだやつが有^あふがな、其^{その}頼^{たの}人も合點^{がてん}たり、眞直^{まっすけ}と白狀^{はくじやう}致^{いた}せ莫耶^{ばくや}が劔^{けん}も持人^{もちて}人^{ひと}よる、正根^{くさね}腐^{くさ}た股五郎^{またごろう}、病勞^{やみつか}れても儕^せらごときと正宗^{まさむね}を出^ですとも及^{およ}ばず身^みが指料^{さしりやう}の此^{この}刀^や、工^{たく}の腸引^{はらひ}出^でして洗^{あら}ふて見^みせふか、何とくど、胸^{むね}と覺^{おぼ}への一^{ひと}くを見透^{みすか}されたる、股五郎^{またごろう}、頼眞^{つらまこと}赤^{あか}と云^いふ鳥^{とり}の返^{かへ}す詞^{ことば}もなかりしが、面目^{めんもく}なげと顔^{かほ}を上^あ、さう云^いふ誤^{あや}た、相果^{あひは}た親共^{おやども}が義^ぎを思^{おも}召^めれ、折節^{せつせふ}の

異見が耳に當たひがみ根性彌つゝのる色狂ひ、放埒の友を拵ふと、志津馬殿を廊の魔道へ引入たに成程拙者そふ見顯されてから一言もござらぬ好色は魂奪れ大恩の師匠を仇と存じた非義非道只今夢の覺たる心地は推量の通り正宗の刀、拙者が持て何と致さふ、有様は色遣ひの金、がほしさそこへ付込右の刀を奪取てくれるならば金子千兩禮物は遣さふと頼んだ者も外ならず、拙者めが一家ながら思へばこいつが悪智惠の根本から打明て上るに今々心を改る證據、仮も悪い工みの致さぬ事、もふくくふつくこりはてました、是迄の不屈最前よりの不禮の段、先生眞平は免下され、こふやた計でいれ得心有まい、彼正宗を望た物、拙者への頼みの書狀、は目よかけけるが、二心ない股五郎が譯と、取出す一通手は渡し、懺悔と誠を荒涙誤り入たる有様は、心は油斷いなければ共、良病中の老眼は燭臺引寄狀の當名、澤井股五郎殿、同城五郎、

さも有んと長みをつぶく胸は疊越突出す白刃と右劔の抜打眞向
へ切付る、シヤ國賊めど付入て、澤井が肩先切付たり、こなたもしれ者請流
し、道が名を得し行家なれ共、初太刀の手疵は眼眩、請太刀は成てたちく
たち、引よど見へしが飛違へ、澤井が眉間丁ど切下り付込すくい、切脾腹
をかけて切込太刀先、きう所よりや當りけんどこつかど座する椽の下、股の
付根を貫く切先、立もせずたしみがけ、非業の劔は和田行家むぎんの最
期ぞ是非もなき、どいめの刀引ぬいて疊あぐれ、奴の實内澤井様お首
尾は、主は見かへて身共へ加勢適出かした褒美くれふ、忝しと立寄
實内けさゝすつばど、邊りを見廻し、兼て工みの股五郎、上段の床の間の
刀箱取出し、蓋押開けぱこりやどふじや、刀はなくて狀一通、こゝ心得ず
と星明りよすかし見て、正宗の刀一腰子細有て私方へ預りや所實正
也、和田行家殿、佐々木丹右衛門判、扱ひ刀は丹右衛門が預り居よな、無

益の骨折口惜しど、手疵もえつかど鉢巻えめ、表の目飛石傳ひ、裏道さして落て行、曲者が入たるぞ明しを持ど奥方の聲も追々、必共、折から欠くる丹右衛門、伏たる死骸の、行家様先生を何者が手よかけしぞ、今曲者が此小柄澤井股五郎、遠くに行まい家來共、表をかこへど高股立、聞と、等しく家内の騷動上を下へと、「立騒ぐ、桐が谷の裏道づたいに、勅使見送り奉る跡押へ、澤井の一黨其身の素襖欠烏帽子皆一様の装束、君臣の禮義黙止がたく、星をあざむく高挑燈事嚴重に見へよけり、備への中を股五郎、疵持足の裏道を押分て打通れば、それと見るより野守介、股五郎殿でないか、心得ぬ面体氣遣い、えと、聲をかくれば、傍り寄兼て申談せえ通り、今日行家が方へ参り、何角事を謀しよこつちの底意をけどりえ上、法外成申分骨髓も徹したれど、強敵の行家なれば、計略をもつて只一討併殘念ない正宗の刀持歸らんと存じた所、丹右衛門が預り居

事、慥な證據せうこに、此一札ナニ、城五郎殿、我是へ來りし一人の母の事、何卒
此世話頼たい爲計り、一家の好よしみお頼みす、一日よても生延てゐ行家一家
の奴原やつばらは、未練みれん若と云れん、家名の耻辱ちじよく一家の耻恥、我一人切腹致せば、跡
の難義なんぎの氣遣ひなし、此世の名殘おさらばと、云捨てかけ出す城五郎聲
かけ、イヤ先待れよ股五郎、身不肖せうなれ共澤井城五郎おかくまいすたい
意氣地いきぢよよつて討うたれし我わが頼みし事起おこる、聞捨きん致してゐ武士
道の表が立ぬ、此上こゝの我わが命いのちにかけてかくまいん、先祖の意恨今此時、
出かされたり股五郎、譬和田一家のやつ原君命を以て來る共、何程の事
有ん、一時も早く屋敷へ歸り評議を定めん、油斷ゆだんの不覺ふかくの基もと也、露路ろじの用
心氣遣ひし、氣を付られよ近藤殿、其義ごうのちつ共氣遣ひなし、歸宅きたく濟迄き
役目指ゆびでもさすべ彼らが家の一大事と、備そなへを乱さず振出ふりだす、威光輝いかりやく
鎌倉山、連て我家へ立歸る

○第三 圓覺寺の段

されば澤井股五郎行家を討て立退より、直まかけ込圓覺寺、門戸を閉して、關近藤海田荒川澤井を始、智昵近の若殿原、若上杉より寄來る共引ひかへさじ弓鉄砲、佛の説し法の庭平等大會より引かへて、修羅の街の大評定方丈、せましと詰かけたり、股五郎一禮し、物數ならぬ、倍臣の拙者、城五郎殿の一家の好其縁より連は歴々の昵近衆、はかくまい下さる段、身より取ての面目此上あり併ながら主人上杉憤り深く拙者が母を人質より捕へ置、股五郎を渡さずば、母を成敗するとの難題我故より一人の母を殺すも不孝、且の好もなき昵近方、斯騒動より及ぶも氣の毒、やはり拙者を上杉へは渡しなされ下さるべしと邪智を隠せし賢人顔野守之助進み出、何さく其遠慮より及ばぬ事、此度我々が荷擔するに手前の爲計でない、上杉より此方共年來の意恨有、武將のは先祖尊氏公より譜代相傳の昵近武

士、元弘建武の古へ、尊氏公は粉骨を盡し、忠義を勵みし我々が家筋、上杉を始其外の諸大名は、旗色のよきも従ふて、降参した腰拔の家筋、我の顔も高祿を取、昵近衆を蔑も輕しむる日頃の存外、ことがなありと思ふ折節、お手前をかくまふたひ、上杉も恥を與へる爲さ、案の如く上杉此事を憤り、追付是へ押寄んと、軍評定最中の由、今太平も治つて茶の湯遊興も日を送り、鎧兜の着様もしらぬ國大名、何程の事有ん、サ、野守殿の仰の如く、日頃个様な事を待受、武藝鍛練の我に一まくりも蹴ちらして、昵近武士の意恨をはらすひ、今此時、敵方より寄ぬ先、此方から逆寄もして上杉も泡吹せん、尤と立ち騒ぐ、城五郎押止め、暫らく、某が所縁有股五郎をおかばい有何れもの、深切忝し、去なが、行家を討たる事の起り、此城五郎が頼みし事、其子細、此度武將の公達、任官の御祝儀も付、諸大名も名劔を獻ぜらる、然も行家が家も、持傳へし正宗の名作有、主

從の事なれば、上杉是を取て献上すべし左有^{あれ}バ彌上杉が鼻高^{はな}く、威^いをふるん事心外至極、何とぞ此刀を奪^は取て、某が手より献上すれば我^{われ}の勿^{もた}論^{ろん}昵近衆の、手柄^ても成^{なる}と存じ、股五郎云ふくめ、行家めをぶち殺さした^らい、正宗の刀を取ふ爲計思ひの外此刀、行家めが手いなく、佐々木丹右衛門が預りある由、股五郎を請取たくば、老母^{ちち}鳴身^みが命を助^{たす}けび、正宗の刀を此方へ渡せよと、難題^{がんだい}の使者を立たれば、此返事の有^{ある}迄い、暫くお扣へ有れよと、云間程なく馳來る門番^{かち}の者、佐々木丹右衛門を今朝の返^{へん}翰と、指出す文箱を城五郎、封押^{をしきう}切て一通をさらくど讀終^{よみおは}り城五郎が思ふつぽ、股五郎をお渡^{あれ}し有^{あれ}バ母鳴見が擒^{とり}を赦し、正宗の刀を遣^はいすべし、追付二品共丹右衛門持參致さん此文言、後刻は出を相待居ると、口上を以て返答せよと、蓋引まひる明文箱^{もんぶんさば}、取^とり早く走り行^い、コレ城五郎殿一旦かくまふた股五郎今更のめくど上杉へ渡し、夫で武士が

立ますか、我も其意得ぬ貴殿の上杉が恐ろしいか、憶病神が取付いたか、卑怯至極と誥かくれば、股五郎押えづめ、どなたもおえづまり下されい、城五郎殿拙者が命のおしみのせねど、武士の意地を立ぬく貴殿が、今も成てふがひなく、上杉へ渡さふどの、エ、聞へた、行家をふち放した計で、お頼みの正宗手に入ぬは立腹、夫故でござるな、左様の事ではない、今合戦も取結ぶとも、只世上を騒す計、望の刀が手に入ねば無益の沙汰、一旦和睦も事を納め母の鳴身と正宗を請取た上、お身も縄打て心よく相渡し、使者の歸りを思ひがけなく、多勢をもつて引包み奪返す我工夫、いづれも必隠密くど、聞て皆も勇立、誠も智謀勝し貴殿、左様あらで、叶ぬ所、然らば各其用意と、騒ぐを押へて、先待れ、謀の密なるを以てよしとすれば、某が詞を出す迄、いづれもお扣へ下さるべし、股五郎が後の災免れさする屈竟の、忍び所の九州相良密も落す用意万端

ニ吳服屋十兵衛是へ參れ、答へて次の間々、小腰かいめて並居る中、おめず臆せず畏り、股五郎様の身の上、委細とつくと承りました、城五郎様へ、數年來出入の私、相良への商ひは毎年下る道案内、見込で頼と太切のお供、畏つた商人冥加、多年の恩報になれば、ちつともお心置れますな、町人でこそ有心の金鉄、二人や三人の苦みの致さぬ腕は請合けちりんも掛直のやさぬ吳服屋が、めつたな引ぬ太り地の男一疋頼もし、股五郎片頬は笑、扱く氣味のよい男、敵持の供すれば肌刀の放されず、行家を仕留た時、見よ弓手は二個所の疵忽治したる此藥は、城五郎殿の家へ傳へる、南蠻國傳來の妙藥、身共を同道の人へ、いづれも是を懷中さず、お手前もまさかの用意、此印籠を預るが股五郎が一命を頼印と手は渡せば、是は結搆なお藥でござります、怪我と病氣の何時知ず、道中の肝心と取納めたる折こそ有又もかけ來る遠見の者、

上杉の使者佐々木丹右衛門綱乗物一挺供いねづか三人只今門前迄、
よし／＼、云付し如く門を開き隨分神妙な取扱はからひ此所へ使者を通
せ、いづれも裏門より先へ廻つて待伏の用意／＼はやり男武士、
我一急く裏門口、股五郎の十兵衛と引連、奥へ入るける琴を弾じて敵を
避竊窺として檻穽の謀もや有らんと心救さぬ丹右衛門、使者の禮義の
上下も、四角四面の方丈へ網乗物を昇入させまづ／＼と打通れば、城五
郎、威儀繕ひ、聞及ぶ邊に佐々木丹右衛門とあ、今日の使者太義／＼
今朝も云送りし通り武士の意地によつて爭論も及ぶといへ共かく靜
謐に納りし代は私の意恨もて合戦を取結ぶに武將への恐れ有、罪の罪
成股五郎望に任せ渡さんなれば、此方々も望しとく、正宗の刀、並びに老
母鳴見が事上杉殿に定て送られつらんすな、成程／＼、主人上杉顯定
怒りの元、股五郎一人逆磔の刑を行ひ、國の政道を正すべき存念、股五

郎だゝお渡し有ある外ほかも曾かつて子細こさいあり、則是こそお望の正宗、並びも老母を誘ゆう引いんせり、いざ改め下さるべしと、箱はこも納なし持參の刀取出せば手も取上きう、切先物打は鉦はき元とつくと改め鞘さやも納なめ調、聞し違ちがはず、天晴名作、慥たしかも落手と引さげて立上る丹右衛門引とめ、調鹿忽也城五郎殿、股五郎を是へ出し、老母と互も取替かざる中、むざと刀はお渡しすさぬ、サ解死げし人股五郎も繩打てお出しなされ、調近頃我儘千万と、眼を配る勇氣の面色、チ實尤是の身共が鹿相、然らば刀の暫くそれと追付解死人渡しすさふが、先其方の囚人老母鳴見が替らぬ體てい、母も科なければ最早繩目も及はずと乗物の網取拂あみひ、引出す姿縛しばり繩、子故も科を身も老の耻はと、鳴見が憂思うれひ是非も繩目をほどき捨、丹右衛門老母も向むかひ、子息股五郎を此所こもて請取上こひ、其元が命を助け城五郎殿へ渡すべき旨、今朝殿々仰の通り彌承知成べしと、聞て鳴見は、顔を上あ、誠まことも悴せみが不所存故、あなたこな

たへは苦勞かけ、僧いやつとい思へ共、天地の間は親一人、子一人の股五郎、未練共比興共笑ふ人の笑ひもせよ、どふぞ助けてやりたいと思ふが親の身の因果、主人へ對えては不忠者の恥なれ共、母が命を助ふ爲、繩かゝつて出よふといふに、此親の孝行者、老年寄た此母が詮ない命生延て、我子が刑罰は行はれるを、詠めて何の嬉しかろお情返つて恨めしい、股五郎此母の様な憂目と逢ふが殺されよふがちつ共構はぬいといひせぬ、必爰へ出てくれるなよならふ事なら此ばを、替りゝ殺して股五郎が命お助け下さりませ、悪人でも産だ子ゝ違ひがなければいちらしい、お慈悲くと思愛の子故ゝ迷ふ憂涙とゞめ兼て見へけるが、思へば誰しも恨なし、此科の起りといふはよしない刀ゝ念をかけ成敗も逢も名作の劔は我子の敵と云つゝ這寄棒鞘をすゝと拔手も見せばこそふゑのくさをかき切たり、是にかかけ寄、城五郎、佐々木も仰

天乗物へ、手負を打込ゑつかと押へ城五郎も目を放さず底意をたぐる
錠縄いかりなま又も大事と見へよけり、澤井わざと空とぼけ、ゴシヤ丹右衛門、契約の通
り鳴見を受取うけとりさふかいいかよも科人股五郎を請取かゝり、母が命は
助くべしと契約のすたれど、ハ覽の通り、只今老母は自害致た併し此方
の手で殺しころせす我と我手も相果たは某が存せぬ所だまれ丹右衛門、
かくまふた股五郎を了簡して渡すは何故老母を受取ふ爲計、親の命を
子よかゆる太切の鳴見なせ殺した、元のとく生て渡せ左なくば澤井股
五郎もいつかあゝ渡しわたせぬ、サア老母を早く請取ふ、サア何とくとと詰
かくる丹右衛門ちつ共騒がず、鳴見が自害いふて返らず弟子として
師匠しせうを殺す極悪人ごくあくにんの股五郎、目の前で親が死だれぱとて、悲しむ様なや
つでなし、まして縁者の城五郎殿、鳴見が最期を夫程も惜まつゑやる様
ない誠の老母が事の付たり、正宗の刀がお望でござらふがの、夫共刀

い入ぬ、老母を生て返せとあらば拙者とても詮方あし約束變改元の白
地罷歸つて此趣主人上杉も言上し一家中はへ押寄鎗先を以て股五郎
を生捕ふする分の事、人非人の澤井が母、死神の付たは是天罰、軍の血祭
早くたべれど、手負の刀ぐつと引拔、正宗の刀の切味お望あらば相伴
あされよと寄バ切んず屹相も肝先ひしがれ城五郎、是さく、丹右衛
門此方々事い好ぬ、いか様よく思へば自身覺悟の鳴見が最期全くお
身が業でいあい、刀さへ渡し召るれば云出した武士の意地さつぱりと
立といふ物、股五郎をお渡し有か、渡さいで何とせう元より彼も覺
悟の上、股五郎最期の時刻近付たり尋常も是へ出やれ、とく支
度仕ると返答立派騒がぬ澤井海田、荒川前後を圍ひ、其身は丸腰惡びれ
ず優くと座も直り何な使者は太義傍輩を討た意趣の元の外でない老
ぼれの和田行家、年もめんにて立てやれば付上り、此股五郎を劍術の弟

子などし師匠がほ顔が胸惡むねわるは何の苦もなく討放うちばなした、は身達みたちは安やすと搦捕からめどらるゝ股五郎でいなければ共、身共故みどもは一國の騷さわぎと成が氣の毒どくさゝ命惜めしまぬ武士の覺悟かくご城五郎殿いざは政法こせいほうは行おこなわれよとむす座を組手を廻めぐす、
適あつたれく、其方が命一つで騷動さうどう納おさまる國家の爲、恨と思ふお股五郎と捕とり縄ちわたぐつていまえぬ縁ゆかりはつながら城五郎、身共みどもは潔白けつぱく見届けたか丹
右衛門、是で主人が心も満足まんぞく、扱あ此老母死骸しがいを進上しんじやうすさふか、イナサ死人の
入いぬ持ていゝやれ然らば科人、其刀只今取かへ請取しんしゆせう、いざと縄付なづけ
棒鞘ぼうさやを渡す目配めくばり、請取氣配しんしゆきばいり互きつとは屹度立別きつとれ、是で双方意恨ゐこんもさつば
り、老母が死骸しがいの乗物のりものは此儘屋敷へ早急はやきふげ、おさらばと目禮めれいも龍りやうの
腮あごを出て行危あやうかりける、次第しだいなり影ほの暗くらき黄昏時たそがれとき縄付なづけ引立丹右衛門、
前後ぜんごを固かためて行過いりかる、思ひがけなき山門さんもんよりはつしと射やかくる白羽はくうの
矢膝やひざはかつきと、いかにと引拔ひきぬ間ひまも又一筋弓手の腕かひは立騷たさわぎ周章しうぢやう驚おどろ

く同勢が中へむら／＼物影が、顯へれ出たる數多の武士物をもいわず
拔連て家來を胴切車切切ふせ／＼一文字を切てかゝるを丹右衛門前
後左右に渡り合、其間、澤井を引包み何國共なく奪ひ行、南無三寶とか
け行を荒手を入替たゝみかけ、既に危ふき其所へ、心ならずもかけくる
志津馬、一大事と拔刀、命限り根限り火花を散す、強勢勇氣相人の大勢
身の二人金鉄ならね、丹右衛門、數个所の手疵刀を杖、志津馬殿か、口
惜や股五郎を奪取れた無念／＼と計かつばと伏、はつと志津馬もと
うと座し、よゐるを付入家來共、おくれませ、池添孫八片端撫切ばつ散
し、志津馬をかこふ忠義の働き、お谷も斯と氣もそゝろ足もしどろゝ走
り付、志津馬の手を負つたか、若旦那手の淺いぞ、氣を慥／＼と抱
起せ、手疵の痛まねど、是が正氣を失なはず、居られふか、股五郎
の手に入らず、正宗の刀の敵へ渡す頼みと思ふ、佐々木殿、此深手いよ

いよ殿への云譯いひわけあり、運命うんめいも是限りど、刀逆手さかても取直す、ア、コレ待た、そなた
が今死して爺様とじの敵てきの誰が討うち、其敵サアが討うちられぬ故此切腹、イヤくく何ぼうで
も放しはなせじと争あらそふ二人、倒たふれ伏ふたる丹右衛門、むつくと起おきて、志津馬
早はやまるな、股五郎うでごろうを奪取うばいとりれたん最初さいしょと覺悟かくごの前、正宗の刀の我手あても有ある、
すりや最前城五郎も渡されしん、チ、サ、アレハ、贋物にせもの行家殿を預りし、正眞の刀
のいつかな渡さぬ、誠の正宗志津馬が手々主人上杉さしあげも差上上杉公々、武
將けんじやうへ献上けんじやう有時あるの家の譽はまれ是を功こうに敵討かたきうちの願ねがひを立たさす我工夫わくふうどの思
へ共城五郎の音も聞へし刀の目利めき贋物にせものを突つけて受取うけとり邪智じやち佞人ねいじん先
正眞を改めさせ、直く様取て鳴見なりみが自害じがい乗物の中なかの疵口すりかへで摺替すりかへた贋正
宗誠しんは是もと乗物きりぶつを取出きりだす切柄きりが正銘の極め、爰も今際の鳴身なりみ、早たへ
たへの息いきの下した股五郎うでごろうが親の身で丹右衛門様と云合せ、城五郎を誅たばかりし
いどうで非道な斡いめが命の所詮叶なりいぬ共、殿様のお手も渡れば、竹鋸たけのこぎりか

磔^{はりつけ}のほ成敗^{せいばい}の知^{しれ}た事、せめて武士らしう志津馬殿と敵討^{かたきうち}の勝負で死れ
ば何ぼう嬉^{うれ}しい親心、此塲を見通^{のが}し下されとお頼^{たの}みてけふの時宜^{とき}、チ、サ老
母の頼^{たの}みもなく共、志津馬と討^うさまやならぬ敵、わざと敵^{てき}へ奪取^{うばひ}せ、丹右
衛門一人が誤りも成て相果れば、月日を待て本望^{どんげ}、遂敵の首を先生の位^ゐ
牌^{はい}の前と身が墓^{はか}へも手向^{たむけ}てくまやれ頼ぞと最期^{さいご}の際迄^{きわ}、師弟の義理、我
故命を捨らるゝ此大恩、いつの世もかへすゝも殘念^{ざんねん}の、大敵の股五
郎、志津馬が助太刀後立^{たごうしろだて}と、頼むこなたも今別るゝ心の悲しさを推量^{すいりやう}有^あ、
不甲斐^{ふがひ}ない志津馬殿、丹右衛門の死する共無念の魂^{たましひ}、此世を去ず、郡山の
政右衛門こそ我も十倍勝^{まさ}りし達人、早々歸つてお谷殿、助太刀頼むとい
はず共、彼が爲^{ため}にも舅^{しやうと}の敵、違背^{いはい}のあらじ早さらば此世のさらば未來の
門出、丹右衛門様、鳴身殿、思へばけふの言合せ、敵と敵が修羅^{しゆら}の道連^{みちづれ}、どい
めい互^{たがひ}も一^{ひと}刀と落たる刀指添^{さしぞへ}をよろめきながら取上て、眼にくらめど

胸むねと胸むね差貫さつらねいたる、義士貞女歎なげき志津馬も深手かたのよゝり、家來かたが肩かたと敵かたの圍かこみ齒はをくいしばつて立歸たてかへる心の内こそ「せつなけれ

○第四 郡山宮居の段

君万歳いんりの祈いのりとて、神かみと歩あゆみを運はこぶなりく國の初めの其昔、誰名付てや郡山とほりやま、城下じやうげの見付筋武家町人のわからなく、引もちぎらぬ弓八幡奉納願主はん譽田大内記殿きだん、謠うたひの番組數かずも、打納うちなりし隅田川すみだ、あらお目出たや目出たやと、上を見習あそふ下しもかゝり、頓とんてお立を松影まつかげと列れつを正して待居まちたる空助が聲高こゑたかと何と能助のぞとふ思ふ同し様と云いひ勿躰もつたいあい事だが殿様の遊藝ゆうぎがお好故すきゆへ、けふい何所どこの奉納ほうな明日あすの爰こゝ、玄くろやのと、毎日のお能のう我われも其お家と奉公ほうこう仕して居ながら、其氣のないい冥加めがない事でないかど、いへば能助打笑うちわらひ、何なんを空助がいふやら、そりや我が藝氣げいきがないよよつてそふ思ふ、おらが親おやのきつい能が名人めいじん、名さへ軍陀羅夜ぐんだらや、刃や右衛門と

いふて、道明寺の祈りの段、面白い事だ、コレヤ能助、道明寺といそりや干飯
じやないか、必外でそんな事をいふなよ、ハアッ謠の名いサ、何とやら、サ、思
ひ出した宗善寺、コレヤおかしい宗善寺とい津の國は有る事だ、い、そんな
ら我がのも違つた、道明寺の河内でないか、イヤ、宗善寺は違ひない、ハテ
片意地な者、コレヤ能助お身の藝者の子なら狂言の心が有、何と稽古してく
れまいか狂言覺へて何をする、ハテ殿様が愛好だ故毎日、此通り、いか
よ下じやといふて、其氣のない何と不忠で有まいか、コレヤ尤じや、稽
古して、やろ第一足取を稽古せい、サ、おらが歩行よふとせいと、鳥居の馬
場を能舞臺、さいらしげな身繕ひ、それ、手を振事ない、兩手を
かうして、そふだ、歩行様を覺へたか、合點じや、ハテ垢切を切し
た時の歩行様と覺へて居よ、おらがいふ様は跡から云へよ、かやうい
者の此邊りな住居致す者でござる、頼んだお方が狂言を好せらるゝ故、

我も稽古致さふと存する、太郎冠者有か、エ、悪い覺へ、く此返事も仕てくれい奴を呼出すの極つて有い、身が前へ出あがらふ、サアそれい芝居のせりふだ、い、エ、お前もぬるくて悪い、エ、そんならよしとせろくと、おだ口くを云廻す、お立と觸る聲々も、恠り驚きまじく舞まゐるか、いみ扣へ居る、威光輝く大内記殿、奉納首尾能納りて早御下向の先拂ひ、徒御近習前後を配り鳥居前迄出給へ、供も宇佐美五右衛門中扈從も召連られ、前間近く引添へ、跡押へ、櫻田林左衛門指南の棒を振廻し鼻高く、と供す、暫く是にて御詠と宇佐美が詞も近習の武士は腰かけを奉れば遙跡も能太夫源之進は傍近く手をつかへ、今日殿様のお能、恐れながら驚き奉ります、いつくも出来させ給ひ、神も納受ましまさん、扱一家中、どなた様もきついお上手、殿様の機嫌の程は窺ひ奉ると申上れば打笑給ひ、源之進、是といふも其方が指南

の徳と、宣^{のたま}へば、ハア、冥^{みよ}加^かないは詞時の面目有がたしと云さつて一禮のべければ、重て仰出さるゝい、^調浦山^{うらやま}しい源之進が身の上、我望の外なれ、能太夫も成て、^{せうぐ}猩々^{せうぐ}の乱れ一世一代が仕て見たいわい取分今日の奉納も、我一人の力もあらず、一家中の者迄も満足せねば、奉納とい云がたし、殊も天氣も宜しければ、我悦び限りなし、太義くど有ければ、皆一統^{どう}も頭をさげ、^{ハット}計も平伏す、五右衛門は前も手をつかへ、^調誠^{まこと}も殿様の意の通り、今日の一入^{ひとしほ}天氣宜敷は祈願の奉納一家中の者も上るゝ及ぬ我々迄も^{きやうきやう}恐悦^{きやうきやう}至極^{しごく}も存じ奉る、恐れながら五右衛門が願ひの筋有、先達ては取次仕る唐木政右衛門義、劍術を立お家へは奉公も出し、所名のみ計めて其器量有なきをば上覽も入^{いれ}奉らず何卒林左衛門殿と立合の者、は高免遊されは様も願ひ上奉ると聞も敢^{あへ}ず林左衛門^調、是くく宇佐美殿、は上へ對し恐れ多い願ひ尤政右衛門とやら貴殿

の世話はよつて、劔術けんじゆつをや立は奉公も出られた人、武士の相互、成程か
望ならぬ相人あいても成て進せうが、そまやもふ蟻螂どうろうが斧とやらや事さ、いか
ぬ事じやく、よしは仕めされお氣のさへられぬ、此林左衛門相人よ
の餘りおとなげなく何の夫が一溜りたまも有物か、殿もおかしく思し召、
ゝゝゝ、どあざ笑ふ林左衛門の見向もせず、右政右衛門義不鍛鍊ふたんれん成者杯さき
ど、影口をや者もいよし、左様成者もは知行を給ひりひての取次仕る此
五右衛門、一家中へ相濟やさず、是もよつて政右衛門も立合の義は願ひ
ア上い様と申聞せ共、彼も新參者の義故辭退たい仕る、何卒、此義は上々仰付
られ下さらば拙者が面目此上なしと、餘義なき願ひも内記殿、武の道のちの
尤なれ共、我其家も生れながら劔術の事、とんど氣が乗ぬぞや、政右衛
門事の家老共がきつい取持、兩人の立合どちらが劔術善惡もせよ某
が構かまのぬ事、家老共が得心せば、身が事の何時でも見物せん今日の奉納

もどかく家老共不得心、そちの又未明々出て忠勤盡す其替り、余が好ぬ
事ながら始ての願ひ、聞届んも道ならず、政右衛門事の辭退致すと、な、兩
人の事の用人方へ云付てくれう其代り近日若宮の八幡宮へ春日龍神
奉納仕たい、又家老共が何といふと、其方が計らひせよ、とかく遊藝
が樂しみが深ひ、願ひの通り聞届けたと、は上意の詞は、宇佐美が面目
添涙はひれ伏ば、大内記殿仰より、奉納の場所へ諸人の入込、神拜の恐れ
も有べ、其方の跡は残り、神樂を上社内の清め、仕れど、云捨座を立給
へべ、横は漫る櫻田が跡は引添べ、さしめき渡るは供先駒の嘶き響の
音本城さして歸らるゝ、は跡見送り五右衛門の一人言、追大家の殿様、
是程はお好なさるゝお能うかへ、林左衛門と政右衛門立合の勝負、は願
ひ申たれべ、早速はお聞届下さるゝも、日頃の願ひ本望と、社内をさして
行折から、と松影より呼かけるゝ女の聲、何者成と見合す顔、は谷殿

でないか面^{めん}躰^{たい}あれし人相^{きづか}氣遣^いのしやと尋ぬれば、お谷^やの涙押拭^{なみだおしぬぐ}ひ、包
むとすれど女の事、有様^{ありさま}はお咄^{うた}しやさん、國元^{くにもと}から歸りては政右衛門殿
の心底替り出るも入るも不機嫌^{ふきげん}、此刀を差出し是を持て五右衛門方
へ行といふた計^{はかり}は物をも云ず、どふいふ譯やら合點行^{あてん}ず、問かへされぬ
日頃の氣質^{きしつ}、此^{こゝ}前^{まへ}は逢て様子もいふと、其儘^{まま}立て來りしが通りかゝり
てお前を見請殿様のお立をバ忍んで今迄相待しと、刀取出し差^さうつむ
き暫らく詞もなかりける、宇佐美のつくづく打ながめ、心得^{こころえ}ぬ、それ
よく、こりゃコレ我秘藏^{わがひそくら}せし長船^{ながふね}の一腰、其方が親代^{しろ}と成たる印^{しるし}は遣^やいせし
み、持せ越たの合點行^{あてん}ずと、引ぬき見れば物打^{ものうち}は卷添^{まきそへ}し一通^{ひととほ}、くいかよ
ど解^とほ^きどき見るより悔^がり、こりゃこなたへ暇の一札^{いっさつ}様子が有ふ語られよ
ど、詞^{こと}はお谷^やの仰天^{げうてん}し、何^{なん}わ^たしへの去狀^{さじょう}どや去^さるゝ覺^さへ微塵^{みじん}もなし、ま、
聞へぬぞや政右衛門殿、科^{とが}もさい身をむきたらしう去^さといふとたが妨

めた、お腹はらも十月たゝもない身を情なやとかつばどふして、泣居なきたる、五
右衛門せき立たて、こなたも武士の娘でないか魂たましひの腐くさつた政右衛門跡を慕しの
ふ事ことはない、口惜をい我眼われめの見へぬが誤り、天晴あつ器量われきりやうの有あるやつ、何とぞ出
世をさせんと思ひ、今出頭顔する林左衛門と一勝負立合ひとしやうぶさせ武藝ぶげいの器
量りやうをあらわし、一家中の手本とせんさすれば、殿とねも遊藝ゆうぎの事か捨すな
れ、武道の道みちも心をよせ給たまへ、お家のお爲と思ひしゆへ林左衛門と
立合たちあをすゝむれ共辭退じたいする、臆病風おくびやうも引ひかされた大腰ぬけめが此儘このままも
相止あやめ成なりし時とき、一家中の物笑ものわらひ、願ねがを上あしは前まへの手前てまへも言譯ごんぎあし、
不甲斐ふがひあやと計はかみてどふと、座ざを組居くみたりける、お谷やも俱とも泣なくどき、夫
の心の直ただる様よう、比怯者ひきやうといわれぬ様ようも、思案しあんを頼たのむ五右衛門様と取付とりつ
歎なげけつ、そふ思おもふも尤なほ、最前さいぜんも殿とねのまへで、林左衛門めが我われも向むかひ、彼等
を相人あひても立合たちあへおとなげあしと、人もなげなる難言過言なんごんかごん聞きぬ顔かほへ何ゆ

へぞ、お家のか爲二つゝの儕わいを、出世させん物と思ひし事も恩を仇あだ但し
國元の騷動さうどうを聞一家の縁を切所存か、儕ゆへゝ勘當かんどう請し此か谷、某が
親と成女房なごらふ持せしゝ科とがなき者もの疵きずを付つ退出しておこすのみか、親代
ゝやつたる此刀の物打う暇いとまの狀を卷付まきつけし、我を欺あざむくゝつくいやつ心
肝かんよこたへゝゝこたへて了管れうけんならず、年寄たれども此宇佐美、尖すさめき刀
金の切味見せんと一圖と凝こたる國侍くにかさふりお谷やの取付とりつけゝゝか待下されど、す
ゐるを拂はらひゝ愚おろかゝ一先こなたゝ、屋舖へ歸り何氣もなくもてなさ
れよ、我も跡あとを押おしかけて、事ことよらば先手を取て切かけん、其時こなたも
此刀で尋常じんじょうゝ自害せられよ未練みれんゝ心殘されなど詞立派ことばりつぱゝ言放す、夫の
心の善惡をど、こづまりゝしく帶引おびひえめ、いさまぬ心取直しいさみ、いさ
むや庭神樂にわがみ打連てこそ立歸る

○第五 郡山屋舖の段

昔^{むかし}ハ山の跡^{あと}なれや、今も名のみの郡^{こほり}山家中屋敷もつくろはす、直^{すく}な唐木
の正^{ただ}め有家^{ある}の柱^{はしら}の退^{のきさ}去^りも、奥様役の留^る主^す預^{あづか}り石留武助の忠義者、常の奉
公裏表内證^{うちおもてきいしやうまか}賄^{いそが}ひ聞^きしき臺^{たい}所々必共ばら〜と立出^{たて}武介殿今夜の内
方へ嫁^{よめ}の様が見へるげな、お目出たい祝言振舞^{よろこ}わたしらもあやかる様
よお手傳^{てつた}ひよ参^まりました、イヤは苦勞^{くろう}〜、小身^{しょうしん}の旦那政右衛門様、仲間一
人下女一人、若黨^{わかしやう}の此武助が料理^{りやうり}人やら家老^{かう}やら人手^{ひとで}がなさよ、家中
の女中方を以^も無^む心待^{まち}女郎^{じやうらう}も酌^{しやく}人^{にん}も各を頼みます、イヤ同^{どう}しお給^{きう}仕^じで
も祝言と聞^きべ氣^きがえよぎ〜、え、たが合點^{あてん}の行^ゆぬ事^{こと}、お谷様といふ奥
様、お里歸^{りかへ}りなされてから、聞^きべ去^さられなさつたげな、まだぬくもりも冷^{さめ}
ぬ中新^{あたら}し女房^{にようばう}を入^{いれ}るとい餘^{あま}りな手廻^{てまわ}し、サイ、今度の奥様はどこからお出
なさるのぞや、イヤ我等もかつふつ存^{ぞん}せぬ、何だか知らぬが旦那^{ひでり}が一人吞^{のみ}
込^{こん}で、今夜嫁^{よめ}を呼^よ程^{ほど}も祝言の拵^{しら}へせいと云^い付^{つけ}て出^でられたから、何^{なに}か俄^{にわか}も

料理拵へ、少し計聞はつゝた、海老の舟盛置鯉、置鳥などいふ、えちむづ
かしい事の取置鮎の吸物腹合せの新枕の心ざやげな、肝心の島臺を忘
れて、正月のお古を組かへて間合せ、いかぬ物の銚子加への折形、知て
なら折てもらひたい、何の其様も儀式せいで、でも大事ない、仲人さへな
い嫁入、今迄どこぞよこつそりと圍て有た女中で有、おの政右衛門様
もお顔も似合ぬ色事仕、先の奥様のお腹が立ふ、馴染の女房隙取して、跡
へ来る嫁づらひ、どんなお顔じや見てやりたいと、さがない女子の口
ゝ、うたて浮名の高咄し、憂事の思ひの種を身も持て我内ながら心
置夫の留主を窺ひ足、妙目早く、奥様よふお出なされました、いふ
武介も押下り、幸只今旦那のお留主、お歸りなら、おえらせずさふ、先お
緩りとあしらふ程、いと重るうさつらさ、諸白髪迄といひかはした人
の心もかはれ替る、我内へよふ來たといはれる様も成た、いの、身も

覺へなければ共、親分の五右衛門様、どの様な誤りしたぞ暇の印の此一腰、譯か立ねば受取ぬと、お屋敷も置れねば立寄方もない身の上、見ればいかふ賑やかなが、お振舞でも有のかと、と入れてそれと云かぬる跡先見ずの下女にした、今夜のお屋敷へ嫁込がお入なされます、ヤ嫁との誰嫁、コレ武介、よもやそふで有まいと思へど若旦那殿も女房が来るのじやあいかや、イヤ其義の、武介殿隠してもどうで知る事、政右衛門様のお内義様でござります、下地から譯の有事かして、今夜俄の祝言、わたしらも隣屋敷からお給仕は雇はれました、お前様の先の奥様でつきりとお妾も、見替られなされたは違ひないくつとお幣氣なされませど身もかしらぬ下りの、法界幣氣は焚付けられ、いとし重る口惜さ包かぬれば見て取武介、エ、コレ女中方、役も立ぬ事言ずと、お臺所に人がない爐の炭もついで貰ふ、アイ合點じや、サア皆お出且那のお歸り待女郎、こ

ちらも嫁^{よめ}の相伴^{しやうはん}で、よい夢見よふと打つれて立て行間^{ゆくま}を待兼^{まちかね}てかつ
ぽと伏^{ふし}て、泣居^{なき}たる、お道理^{道理}じやくゝゑたが奥様、必^{かならず}悵氣^{たふし}なされますな
へ、言^{こと}やる事^{こと}いの悵氣^{たふし}とい一通^{ひととほ}りの事^{こと}、非業^{ひごう}の死^しをなされた爺様^{おやさま}、弟^{にい}
志津馬^{しづま}が敵討^{かたうち}の力^{ちから}と頼^{たの}むいたつた一人、其^{その}夫^{おつと}政右衛門^{せいゑもん}、縁切^{えんぎり}たれば誰^{たれ}
を頼^{たの}み大敵^{だいてき}の股五郎^{こごろう}、いつ本望^{ほんぼう}が遂^{とう}られふ力^{ちから}も綱^{つな}も切果^{きりはて}しと思^{おも}へば胸^{むね}
が張裂^{はりさ}ると歎^{なげ}け俱^{とも}み泣^{なき}玄^{くろ}やくり、お氣遣^{いきづかい}ひなさるゝお、譬^{たとへ}且^{かつ}那^ながどふ
かつしやつても拙者^{せっしゃ}めが命^{いのち}も代^かても此^{この}縁^{えん}の切^{きり}しませぬ、悵氣^{たふし}なされ
なといその事^{こと}お前様^{まへさま}のお腹^{はら}より、政右衛門^{せいゑもん}様の^{ごよう}世繼^{よつぎ}がござります
ぞへ、去狀^{しよじやう}取^とふが後連^{のちづれ}が這入^{はい}ふが其^{その}お子^こさへは平産^{へいさん}なされたれば切^{きり}
も切ぬ血筋^{けつきん}の縁^{えん}、政右衛門^{せいゑもん}様の^{ごよう}奥様^{おくさま}といふ、お腹^{はら}が證據^{しやうこ}のお谷様^{やさま}敵討^{かたうち}
の助太刀^{すけだち}も、頼^{たの}の種^{くさね}の人參^{にんじん}、産月^{うみづき}も氣^きをもんで過有^{あやまち}べどふなさるゝ退^{おつ}
付^{つけ}且^{かつ}那^なお歸^{かへ}り有^あば悵氣^{たふし}がましい顔^{かほ}なされず、兎角^{とかく}此^{この}内^{うち}を動^{うご}ぬ様^{よう}もなさ

れませ、合點が參ましたかといへ義理の有女房去て嫁入の祝言のと
旦那のどふしたお心ぞや、拙者もいつさい合點が行ぬ、此蝶花形私
の折様存せぬお前様お頼やますど、いれて手よの取ながら、みすく
夫を寢取るゝあだ憎てらし蝶花形、犬骨折て、早ぶさの鷹の餌も成春の
雉子外も夫の聲聞へ、旦那のお歸暫く忍んでござりませど家來が情
を力草逢たい夫も隠るゝも、疵持心唐紙を押明忍び入よけり、心がけ有
侍の地を這ふ虫も氣を赦さぬ唐木政右衛門、伊達を好ぬ刀の柄前人も
勝れし袴の幅上屋敷も歸り足、武介手を突、旦那殊の外お隙入、用
品のいか躰の義でござりましたな、此間から辭退する彼林左衛門
と武藝の試明朝正六ツ時には前よおいて立あへと、押付ては家老の云渡
し、今晚妻を迎へまする婚禮の中一兩日お延下されど、願ふてもいかな
開入ず、女房呼の私事明日の延されぬと、去どの心ない家老殿、此方の内

へ氣がせく、もし尻しりも成つて漸しづ只今祝言しうげんの掬へ用意の出來たか、よく知
行取あきも飽果はてた、嫁の來る迄上下脱ぬいで休息きうそくせん、枕まくらおこせ女子共、アイと返
事もさし足かどる角を隠かくせし塗枕ぬいまくらそつどかたへも奥様を、ぬがりの見よ
がくれ袴はかまの解とけと胸解むねどけぬ、するどい常の侍、肩衣折かたぎぬて、たゝんで、取直す、詫わの
種かどの見付みつけた夫調、武介、あの女子の何者なにものぞや、やい、エイクイあれ、彼かの今日
お目見に參つた、新參の女中で、さ、ハイ旦那さまお目かけられて下さりま
せ、奉公人じやな、見かけから愚鈍ぐどんそふな、ふつゝかな女なれど、遣ふて
見てくれふ、コリヤ今夜の身共が女房を呼よむかへる、祝言の給仕きうじや付る、アイ、
嫁よめほどお盃さかづきの、其お給仕をせいどのそ里や餘り、イエサアあんま餘り急きうなほ祝言、不
調法てうはうな私が、給仕得あせすば奉公叶かなぬ立て歸れ、イヤ、何でもは意の背そむ
きませぬと、下女げぢよも成ても夫の内、離はなれ兼たる心根を、察さつして武介が吞込のみこむ
涙なみだ、そふだ、奉公の辛抱しんばうが大事、何おつゝゑやらふと、アイ、とそこらを程

よふ、鹽梅加減、お盃の用意せうと、料理を鹽ゝ立て行折から宇佐美五
右衛門様は出と案内す、又堅どうがうせられた、誰ぞ羽織持こいと云
ぬ先から心得て、勝手覺へし女房の徳、機轉聞して後から、着せる羽織を
ひつまよあ、子供でないわい、差出女めあつちへ行と、睨付られ
て、是非なくも、立間せいのしく入来る五右衛門、彌左衛門裁の上下このパ
り切てむすと座し、政右衛門殿、今晚の其元ゝ嫁入が有と承、は祝儀すゝ
参つた、老人の寸志ぞと覽下されと一通を差置、是の、婚禮を祝
しての發句でがな、先以て忝しと、押開き見て驚顔、こりや拙者への
果し狀でござるな、存じ寄ぬ、先其意趣の次第の、知た事、科ない女房
なぜ去た、拙者が女房を、拙者が去ゝ、お手前様が何故の、立腹いふ
まい尤お谷の上杉の家中、和田行家が娘なれどお身と密通して二人連、
此郡山へかけ込だ、勞浪の体不便と思ひ、且のお手前が器量を見込殿へ

中て有付ありつかせたり此五右衛門、其上勘當請て親のないお谷身共が娘分むすめずことして、改あらためてお身み又呉くれたれば、以前いせんの行家が娘むすめもせよ今の身が娘少むすめすこしの見落みおとしし有とても、去さられる義理でいないぞよ、一旦いつたんの恩おんを忘わすれ、外の女房持もちかへて、五右衛門を踏付ふみつけた仕方堪忍かたかんにんならぬ、それ共、お谷よんざくろ又據よない科とがでも有あるかそれ聞きかふ返答へんた次第、座ざに立たせぬと鐙打づばたしいて詰つかけたり、イヤササ重おもくは尤千萬、お谷み又微塵みじんも科とがいなし去さた子細こづきに別義べつぎでいない、飽あました、女房といふ物の、飽あてからもふく、片時かたときも持て居ゐられる物でいござらぬ、さう、お聞きこなされく、は立腹りつぷくに御尤ごじやが、今拙者うちと討果はたしされてい五右衛門殿、殿への不忠ふちゆうも成なませう、なぜとおつしやれ、今日上けふは意有いて、明朝あしたは前まへにおいて、櫻田林左衛門と劍術けんじゆつの勝負しょうぶを致いたす此政右衛門、是迄拙者しよを推舉すいきよなされ、明日も勝負見分の役目を仰付おうえつけらるゝ其元もとが、此立たち合あも致いたさぬ中うちは、拙者しよをさつぷりと切きてお仕舞しなされて、殿への何いと云

譯わけひなさるゝぞ、是非せひいさ憤はげり晴はれぬと有あべ、何なんと致いたさふ武士いんぐりの因果いんぐり、明日あしたのは前まへを勤しんて、其跡そのあとでお手て又懸けんりませう、暫しばらくく宥ゆる免めん下くだされと理り又詰つめられてさ
しもの五右衛門ごえもん尤い遺恨いこんの遺恨いこん、は用もちひは用もち、明日あした迄いたひ傍輩はうはいの役目やくめ、中なよ
しゝ、は得心くた下くださるか、忝かたじけなくいゝ然しからば今宵こんよひのこれ又、緩ゆるりど、は酒一いっ
献けんは上あり下くだされ、追付おっつけ新あらたしい女房にようばうが参まゐる、イヤ又其器量きりやうのよさ、雪ゆきと墨すみとの
替かへ徳古とくこ女房にようばうのお谷やめ、不器量ふきりやうの上うへ又因果いんぐりと早はやふ子こを孕はらんで正真しやうじんの河豚かぶ
の横飛よこび、飽あたを無理無理とい思おもひ召めいなど、あいそづかしを立聞たちきこの障子しやうじ又齒形はがた
も入計はかりのほ登のぼる、痞つかへを折おりしも有あ嫁よめは様早ようばう是こゝへ、待兼まちかねた早はやふ通とほせ、女子をんな共夫燭そと
臺たい又火ひを燈ともせ、嶋臺しまだい銚子しやうしと騷程さわやほ、五右衛門ごえもんがむかづき顔かほ、玄關げんぐわん又奥座敷おくざしき敷直しきちよく
又、手ぐりの鉾乗物びやうのりもの對たいの簞笥たんす又染込そめこみの覆かほひも愛持あいもち、介添かいぞへ女房にようばう、太義たぎ
イヤ宇美佐公うみさこう、只今ただいまカ妻つまが参まゐつたお悦よろこび下くだされ、は目出めでたい義ぎでござ
る、は推量すいりやう下くだされ、貴公きこう又は退屈たいくつ、コリヤあなた又は酒上さけうへいよ、イヤ拙者しやくしやは酒

たべると、胸むねが悪わるくござる、是こゝの氣きの毒どく然しかバお菓子くわしイヤサお構かまひは無用むよう、ハテ堅かたくろしい何なにがなほ馳走ちそうコリヤ新參しんざんの女おんな、何をうろくまいと、其そ不調法ふてうはふで祝言しゆげんの酌しやく得えせまいお客きやく人の癩癩かんしやく、ソレお脊中せちゆうでも揉もんであげいと、いふ程腹はらの立波たちなみ音ねを泣なく千鳥せんじう、四海波かいしやう扱あ我等われら今晚こんばんの花笠はながさ、上下じやうげを着きる筈はずなれど、あたまから打解うちげる様ようは角菱かくひし止やめて此儘このままの見參みさん、サア早はやふ女共おんなどもの顔かほが見みたいく、マ、お心安こころやすい智様ちやうで嫁よめ様ようのお仕合はうあ、耻はづかしがつてござらずと、サアお出でなされませど、乗物のりもの明あれば綿帽わたぼうし子こは、腰こしが上うべうづもれて、七しち計けいのいと様ようは寮尺りやうしやくも合あぬかい取とはら、帯おビもつられて座敷ざしきもどんど、乳母うはは是こゝ取とてく、マ、中其帽なかつかぼうし子こは、盃さかづきの濟すけ迄まで召めしてござれ、マ、イヤくうつとしからふ、取とてやりや、ソレ戀女房めかけの面像めんざうと、帽子ぼうしとらせバ尺長しゃくぢやうもえまらぬ罌粟けしの花嫁はなよめは、直ただす三寶土器さんぼうどけを乳母うははが持も添そ戴いたせ智君ちきみ様ようへ上あまする、忝かたじけない、女子共おんなども皆みな見みてくれ、何なんとちよつこりと、何處どこも置おけても邪魔じゃまなならぬ

よい女房で有ふがな、ハア嬉しう目出たふ一ツ次の間々千秋万歳千箱の玉と謠聲襦の袖一通取乗立出る、ヤアお前調の母様柴垣様と驚くお谷も目もやらす、政右衛門は、打向ひ、ぐんぜない此娘を女房も持て下され、此上の本望なし、聳引出の此目錄調、主人上杉宇内様、駱志津馬も下され、敵討は免のは書、いよく助太刀あされて下さるお心玄やな、お尋も及ばず、承知致いて、罷有調、新參の女もよく聞、身共は先妻が有たれ共な親の赦さぬ密通、行家殿の勘當の娘どれ合、女め夫の悲しさを表立て、聳舅といふ事ならぬぞよ、今郡山の扶持ちを戴く政右衛門が、よしみもない他人の、助太刀が成べきか、此調お後の世間晴た行家殿の忘れ篋、志津馬が妹も違ひない、此子と今祝言すれば、是こそ誠の聳舅、舅の敵小舅の助太刀仕ると、殿へ願ひゆさんよ、よも不屈と思されまじ、かなたこなたを思ひはかつて、科かもあい女房、去た謂れ、此通り、義理とい

ふ色も迷ふて、五年の馴染も見替た心汲わけて五右衛門殿に立腹の段
く、いざつびらく、免下され、我等もふ酔ました、何すすやられたわい
くど、酒もまぎらす本性の、云譯聞て手を合せ、よふ去て下さんした、其
誠をちつどの間も恨だ女子の廻り氣を堪忍して下さんせ、身共もよ
い年をして疑ひの悪口面目ない、天晴武士かな、政右衛門殿、此祝言の敵
討の門出、武士道も立、家も立、よい嫁を迎へられた扱くくめでたい婚
禮、我等もとも、お取持と、始の腹立打てかへ、一度も顔の色直し、お心
が解たれば彌替らぬ政右衛門が後連のお後や、二世かけて、をなたの男
今夜から抱て寐るぞや、コレ女房共くといへどお後の欠交り、乳母もふ
いふふとやんちや聲、是の娘とした事が、嫁入早ういんでたまる物かい
の、三々九献まだ濟ぬ、殿の盃敷物玄々、あからいや乳母あれはし
ち、あれといふ、お饅か入、おもしろ奥様で有るぞ、道理じやく、かわ

いひ女房も何惜おしからん、併しか一ひとつ過る、半分の身が預る、是が夫婦のかため
ぞど、持せばほや／＼、饅頭まんぢう饅頭まんぢう忘れた、嫁君のは持参のお道具と、簞笥たんすの
引出し廣蓋ひろがたも盛もならべたる持遊もちあそびの市松人形風車いちまつにんぎょうふうぐるま七つ又成子なりこも、殿を
持せ濟えたまやん／＼、濱松はままつの音おとはさ／＼んざ、座ざのかわらねど我夫を、夫
といひれぬお谷の心、思ひやつて居るの、そのもとひなさぬ中、ほん
の娘の此後と見かへさした繼母きぼが、智殿ちでんも悪性根付たわるしやうねと恨うらでばし下さ
んな、勿體無事もつたいふい事ことばかり、わたしは縁きんの切る、爺様おやさまへ不孝の言譯、政右
衛門殿いつ迄も、わの子と添そふて下さるが、家の爲、志津馬が爲、わしや死
る迄去されて居るが、嬉しいわいのと明あし合親子の真心ていしん三國一思ひふ富
士の郡山とけて、涙を汲くかひす、酒もり又入いまめ／＼、と夜も更渡ふれ、稚
子こが、乳母もふ寝ねよふと乳ちさがす、此お子このいの、七つ又成迄乳啞ちやくわる子
が有物か、殿の手前も耻はなされ、大事だいじない／＼、是からが新枕にひまくら必共床とど

を取身も退付寝る、コレお乳母、女房共まゑしやつて寝さしてやりやと痛
り心付く、乳母のお藏が抱かへ、寢所へ伴ひ入れれば、政右衛門
宇佐美が前ゝ手を突改て五右衛門殿へ頼、上たき様子有、サア役
に立すと、身共も力も成たい何なり共遠慮なふ承ふ、どうかく、深
切忝し、近頃兼たれ共、其元様は明日、切腹なされて下されい、其子細
といつば、明六時、櫻田林左衛門と立合仰渡されし、此勝負は拙者負す
る、サア知て有林左衛門が手の内ぶつてふち伏るゝ合點なれど、勝れば前
の意は叶ひ、是々一家中の師範仰付られお暇が出ぬ時の、助太刀の望
が叶ぬ、以前において政右衛門、物の見事な打負、それを落度、知行差
上、浪人して思ふ盡、小舅の助太刀致す所存、時々の拙者が剣術を風聴な
された其元様、負た我等が耻とも見損ふたは耻辱よもや生てゝござる
まい、腹なされゝや成ますまい、これ迄厚ふは最負下され、様くは恩ゝ

預^{うか}りし恩^{おん}を仇^{あだ}とやさふか、腹切て下されど、や出すに五臟^{ごぞう}の血^ちを一時も吐^{すく}きも苦しけれ共、舅^{しゅうと}の敵^{かたき}が討^うたさ、志津馬^{しづうま}も本望^{ほんぼう}をとげさしたい計^{けい}も、かやうの不届^{ふとど}をす上る、は赦^{ゆる}されて下されど、鬼^{おに}を欺^{あざむ}く政右衛門、わつと泣^{なみ}たる眞實^{しんざつ}も、感^{かん}じ入^いて、尤^{なほ}も命進^{いのちしん}上^あり、何^{なん}も安^{やす}い事^{こと}、只殘念^{ざんねん}な林左衛門めも耻^{はぢ}顔^{つら}かゝせんと思^{おも}ひし、返^{かへ}つて此五右衛門面目^{めんめく}を失^{うしな}ふて相果^{あう}るに悔^くしけれど、貴殿^{きでん}が本望^{ほんぼう}とげたれば骸^{かばね}の上で身共^{みども}が耻^{はぢ}も、其時雪々^{すす}と暫^{しば}しの無念^{むねん}、誠有侍^{まことありさむらい}の爲^{ため}も皺腹^{しはばらひ}一つが役^{やく}も立^たば身も取^とて大慶^{たいけい}くど、死^しるを常^{つね}の武士氣質^{ぶしきしつ}、ア聞^{きこ}たか主人^{しゅじん}も預^{うか}るお命^{いのち}を、我^{われ}も下^{くだ}さるゝ有^あがたいとお禮^{れい}やせ、女房共^{にようども}といひにれぬ表^{あらわ}、親子共^{おやこども}又云^{またい}ぬが孝行^{かうぎやう}、勝^{かち}べき勝負^{しやうぶ}を負^おるも義心^{ぎしん}、耻辱^{ちじよく}を取^とては最期^{さいご}も、侍同士の情^{なさけ}けど、互^{たがひ}も禮義^{れいぎ}の中く涙^{なみだ}催^{もよほ}す八^やつの袖時計^{そでどけい}の七^{しち}つせいにあ^あく、ア早勝^{はやかち}勝負^{しやうぶ}の刻限^{ときかぎ}近^かし、身先^{みさき}へ登城^{とうじやう}致^{いた}す、用意^{ようい}有^あ政右衛門、貴殿^{きでん}のお暇^{いそぎ}出るを相圖^{あひづ}も身共^{みども}が切腹^{きりふ}

此邊ハ直様鎌倉へ出立冥途の出立早參る、此苦勞、後刻と式禮默禮、性急
武士の短夜や、明る間を待最期の門出いさんで、此前へ「時過て早明六つ
の、知せの太鼓朝日輝大廣間大内記殿上段の褥、着座近習の武士各、見
物晴勝負、政右衛門ハ大の玄なへ、櫻田ハ兼て、好む所のさぶり流、長柄
を持て待かくる、双方呼吸の透間なく先を取んといどみ合ふ、切先刃金
ハなけれ共鏢を削る心の眞劍、打合ふ數ハ帳面ハ見る人々も息を詰
暫く時を移せしが、兼て期したる、政右衛門櫻田が鎗先を、あしらひ兼た
る手の狂ひ玄なへがらりと卷落され、鎗ハひはらを、と計がハと倒れ
てうつぶしハ、面目あふこそ見へよけれ、勢ハ込で、林左衛門、何れも此
らうじたか、影で廣言ハ誰もいふ、まさか勝負ハかゝつてハ、なま兵法が
役ハ立物でハあい、此様なぬけ作を、お取持なされた五右衛門殿、何と今
此合點が參つたか、イヤハヤ天晴のお目利、と嘲諷譏りも覺悟の前、此前

よ向謹むかひつしんで、不鍛練たんれんの政右衛門を推舉すいぎよ致せし不調法てうほう恐れながら申譯と、云もあへず肩衣かたぎぬはね退のけ差添さそえ手をかくる、待まち五右衛門、あれ留とどよ、注意ちういや、切腹先待れよと、近習きんしゆの聲こゑく、ハッど計暫けいざんし、扣ひへてひれふせば、櫻田林左衛門唐木政右衛門、兩人共是へ參れ、ハッハッど一度の答さへ、肩かたで風切櫻田と、唐木からきの枯かれしえほれ枝見えだみすぼらしげうづくまは躡のりる、政右衛門、只今の勝負しやうぶ、大内記是よて逐一ちくいち見届みとち、其方が致いたし方神明と思ふぞよと、仰うやハッど計夢見けいむけんし心地一座こころいちやうの不審ふしん、其方共今の立合を何と見た、尤勝負きうしやうぶの政右衛門負まけたれ共、弟々あにつくく見るよ、身構みかまへ太刀捌さばき、よつく鍛きたし誠の達人、林左衛門が中々及ぶ所ならず、彼が心を察さつするよ、新參しんざんの身を以て古參ふるさんの者よ恥辱ちじよくをあたゆる、武士の情なさけあらずと、わざと勝を譲ゆづりし、劔術けんじゆつ計か心迄奥床おくゆかし頼たのもえし、併調しかし乍あがらは迄遊藝ゆうぎを樂しむ、武藝ぶぎ疎うとき大名と贈うわさえ云れし大内記、劔術の批判つはん覺束おぼつかなし共云べきが弓取の

家ゝ生れし身が、武藝ぶげいをまらぬ様有んや、然れ共弓を袋ふくろゝし、太刀を鞘さやゝ納るゝ、太平の掟おきて、今足利一統あしかがいつたうゝ治つたる此こゝ代、靜謐しやうひつの世ゝ弦つるを引鐵やじりを研こぎしらひ、鎧よろいよ弓よとひしめくゝ、上への恐れ家衰微すいびの基もと、爰こゝを思ひはかつて、茶の湯亂舞ちやうらんぶゝ日をくらせ共心ゝ捨ぬ、劔術けんじゆつ武藝ぶげいよく知て居る、身共が眼相違有あら、政右衛門せいゑもんを取持とゝ五右衛門、身が爲ゝ天晴忠臣誤りと思ふべからず、又林左衛門事ことゝ、怪我けがの勝をそれどもまらず、いかめしく罵ののしるゝ、我藝の我でゝ見へぬ不鍛練たんでんれん千萬、知行くれるゝ國の費暇つひへを遣はなはす、勝手かたてゝ屋敷やしきを立退たちのりべしと、案の外成御誕意じやうおんたいゝ、林左衛門、一句も上らず、尖すみき殿どのの賢慮けんりょゝ恐れ入たる一家中いけちゆう、は前まへゝ叶わぬ林左衛門、早立めされとせり立られしたゝかなめゝ、大廣間一人すゝゝ立て行い、重おもて政右衛門ゝいふべきゝ、新參ながら其方、武藝ぶげいの鍛練たんでんれん、感じ入、貳百石の加増ぞくぞう付る、黒書院くろしやういんにて改め盃さかづき今いま一家中の師範しはんと成、彌忠義やちうぎを勵すすんでくれよと、いと懇ねんごう

よ仰有、まづく。御座を御太刀持の小姓引連入給へば、近習の面よさめきわたり去とて、政右衛門殿、けしからぬお首尾ふめでたいく、もふお羨しう存じます、我もあやかる爲お盃が戴きたい、詰所又相待居まする、扱くくお手柄く、と挨拶悦ひ請る程ぐらりと違ふ胸算用、二人の顔を見合す計り、只うつとりと手を組て、政右衛門殿、五右衛門殿、是でいお暇願れまい、さく身共も折角切かけた腹がひね又成つたコリヤア、どうと腰もぬけ一度又溜息次の間の襖あらぬ妻お谷肩よかりし柴垣が喉又懐劍突詰し、母の自害又稚子の、お後も跡みおろく目元、二人驚き何故の、此生害、イヤのふ是に覺悟の上、唐木殿の頼もしい心底を聞上り此世は用のない體未來へ參つて、娘お谷が勘當の訴訟けふの様子を見届てと、此廣間のお次迄隠れ忍んで委細の譯、思ひの外の立身でお暇の出ぬは是非もなし、此上ながら姉も妹も、やつぱりこな様の女

房と思ひ敵討かたきうちふへ行れず共、心の助太刀を影かげながら志津馬が力ちからも成てたべ、兄弟共さらばよと、顔を見上見みおろして、盛の梅と替かの櫻跡あとも残して息絶いきたる、コレレのふ是と取付とりつけて泣聲人なみこや菊の間々、大内記殿のこ簾中久方されんちうひさかたは前立出給まへだひ、改あらたて殿様のこ誕意たんぎ、政右衛門が今日の仕方、定て様子有べしとこ窺うかがひなされし所、心の底そこも望有て、わざと我手練しゅれんを隠かくし主を謀たばかりし趣、殊または座の次の間へ女を引入、けが殿を穢とがし科とがもよつてお暇いとまを遣つかはさるゝ、去ながら、暫ふしも扶持ふちし置れし家來、浪人の糧かても盡つきるも不便ふべなれ、かたきうち刀一腰いお暇いとまの印しるしも下さるゝ、殿様は秘藏ひぞうの信國の名作、敵討かたきうちの餞別せんべつといいはつゝ、えやれぬ賣代うりしろあして世渡りの助たすけもせいと、のこ慈悲ひあ有がたふ頂戴たいがい仕やと、小姓も持せし刀箱、打明うちあけさぬ心の底そこ、えろし召めれしおんめく恵みも、相果あいはし志津馬が母、今少し生延いきのほひり、此は誕意たんぎを聞ならぱと、といめ兼たる有がた涙なみだは簾中れんちうもは落涙ちく、父も母もふくれたる共稚子おさぎこは手廻は

りて養ひ育る三世の縁殊更姉の只ならぬお腹も持し大事の身夜の親
分五右衛門の屋敷で介抱如在なふ本望とげて立歸り元の主従對面を
待て居るぞとつゞくも仰も重き亡骸の宇佐美が屋敷で野送りの供
よひかへし若黨武助此世の名残は殿の名残始の妻と後の妻生れぬ子
よも引るれど返すくも大恩の、は前を拜し立出る世の有様こそもの
うけれ

○第六 沼津の段

東路よ、爰も名高き沼津の里ふじみ、白酒名物を一つ召せく、駕籠よめ
せ、おかごやろかい参らふか、おかごくと、稻村の影よ巢を張待かける、
蜘蛛の習ひと知れたり、浮世渡りの様々よ、草の種かや人目よの荷物も
まやんと供廻り泊りを、急ぐ二人連、立場と見かけ立どまり、コレ、またり
大事の用を、とんと忘れた、太義ながらわしが寄た所迄一走往て來てた

もと、急ぎの用事走り書、さら／＼と書認め早／＼と手は渡せば、主
は劣らぬ達者もの心安兵衛逸散元來し、道へ引かへず、稻村影より、且
那中泊り迄参りませうかい、や旦那様どふぞ持して下さりませ、け
さから壹文も錢の顔を見ませぬ、どうぞお慈悲と云かけられ、イヤ／＼わし
の今夜の夜越へ行、そこがお慈悲でござりますと、頼かけられ是非な
くも、そんなら吉原迄何ぼぞや、お前様も、わたしが頼で持のじや物
ゑい程は下さりませ、そんならやえやれ年寄のよしませいで、そん
なら持して下さりませ、か、忝い、お出なされませ、ヤット、任せの聲計一肩
往ての立留り、今日の結構な天氣ぞやな、ヤットまかせ二肩往ての息を繼ぎ、且
那中向ふの立場は、鯛の名物がござります、ヤットまかせと、棧する度、追従
口ふけ田はおとりし、白鷺の餌ばみをするよとならず、見るゝ氣の毒、コレ親
に、殿、ちつと持てやりませうか、ア、それ／＼あぶない／＼、イヤ、勿体な

いゝ、ゝ氣の氣な足元最前から見て居るゝ氣えんどでならぬ是はね
たしが足の癖でござります且那のかけで、けふも内入がよござります、
コナなたもいくつじや、七十ゝ手がどいてござります、ア、ソレく合點
の行ぬ足取、お氣遣ひなされますな、若い時の小相撲の一番も取りまし
たヤットまかせとなどいふ下道の爪先上り、木の根よつまづきひよろゝ
ゝ、見やしやれ、エ、きつい事をえたの、親指の蹴かいたか、ヨシく早速ゝ直
してやろと、用意の藥取出し、付ると其儘、偶とどふじや痛ゝ止ろが、コレゝ結
搦なゝ藥でござります痛ゝんと直りました、サアゝお出なされませ、イヤ
コレゝ荷ゝおれが持てやる、旦那様めつそふな、イヤサ駄賃ゝやる、氣遣ひさ
えやんな、こなたの足元最前からあぶなふてゝ荷を持方がやつと氣
樂ぢ、咄ゝもつて行ませう、サアゝござれど、先ゝ立平作ゝ千鳥足、えんどが
利ゝ成弱弱の砂ゝ成かど悲しさを、小腰かゝめて、や旦那、一肩やりませ

うかい、イヤく是で大分歩行よいアこなたの足元茶めいた物じやの、其足取
を狂言師に見せたいわいの、亂れ搦と言って、傳機事又成そうお事、イヤ旦那
のおつしやる通り大概亂れかゝつてをりますない、ふん、ふん、と、道の伽す
る笑ひ草、踏分て、くる道草又菊の折枝持そへて、見合す顔のどし様か、お
よねじやないか、けふの結構な旦那の供したのでの荷の持すもお世話
又成たお禮やてたも、コレ有がたい、もふ爰おわたしが内、暫くお休み遊ば
しませど、昔の残る風俗も、お葉打枯し松影又伴ひ、入や西日影詔たる中
の二人住門の柱又印の笠、おかけさるりや庭一ぱい、いつそ坐敷へこ
お上りど、親仁が馳走娘の愛前垂の藍薄く共、アお茶一つと差出す、こぼ
れかゝりし藁屋葺折悪ふ湯もわかず、水で成とおみあを、間イヤくもふ行
まする、お娘はよい器量不躰ながら此内よいせゝおげ又咲た杜若よ
い床へ生たいのふ、イヤどなたも左様おつゑやります、自慢で作つて置

ましたれど、近頃の手入が悪さ、いかふ田地が荒ました、何が身構へず賃仕業貧乏の苦もせず、それの孝行もしてくれ、それで私が年寄ての蜘蛛助も、せめて三文なと肩休めど、餘りあれがいぢらしさでござります、コレどし様始めての仕方、其様なさもしい咄しを、ホシニそふじや、ハ、ハ、ハ、およね、けふの大きな怪我を仕てな、コレく是見よ、爪が起てゐる、藥もあれば有ものじや、あなた様の藥きつい妙藥ありや何とす樂でござります、此藥の太切かい物第一金瘡、其場で治る妙藥、武家方よ、尋れ共、金銀づくで手入ぬ妙藥と、語れば娘の猶ほたく、どう様の命の親、一日や二日で、お禮のいひも盡されず、ならふ事なら今宵の爰にお逗留遊ばして、娘何いふぞいこんな内泊まして、肴の干鰯が一疋なし、虱々外あまたの身付物ない、よく不自由仕付けて居ます、娘はがあの様に、しなつてらういしやるので、どふやら爰も根

が生た、大事なくべいつそ泊て貰ふかいと、目の鞘拔し商人も、上手お娘の饗應よころりと、成バお枕と油氣のない眞身の馳走、是も一樹の笠舎り、尋る軒の目印ゐては内へ入、旦那是よござりまするか、お立なされませんか、安兵衛か、早かつた、そなたの其荷物を持て吉原の鍵屋で宿を取りや、日和が知ぬ早ふ行や、雨具の用意の吉原の鍵屋をさして急ぎ行かよ、ね、立て門の戸を引立んとする所へ、平作殿内よかど、ぬつと這入、原の町の古道具屋、市兵衛様、苦勞よよふお出、こちも商賣づく、昨日こなたの言をやる、急な入用錢三貫、道具諸式を直して取てくれといふことなれど、代物見てからのとて手附は三百進せて、残りの錢持て來た、駄賃出しては合ぬ仕事、直が出來たらこな様が荷ふて來て下さるか、時よ、道具といふ、見へ渡つた此通りか、こりや聞たといきつい相違、第一、放しよくいと云えやつた故、見込と思ふた佛壇が、こりや

伊賀越

合せ、忝めんい共面目めんない共嬉こしいと術じゆつない涙なみだがこつちやも成あつて、お禮れいの詞ことばも出でませぬと、破やぶれ疊かさねも喰く付つけべ、今いまのの今夜こんやの宿錢しゆくせん、高たかで知した親子おやこの世よ帯おび、家財けざいを賣う代しろあさふといよく、差詰さしづつた、難義なんぎな事が有あるので、んせういとしや苦勞くろうさつゑやるの親仁しんに殿どの此娘このむすめはより外ほかもふ子供衆こどもしゆないかいの、此こおよねが上うへ男おとこの子こが一人ひとり有あたれど、二ふたつの年養子としやしも遣やましたが、又また其親そのおやの手てを離はなれ、今いま鎌倉かまくらの屋敷方やしきかたへお出入でいしゆ、よい商人あきんども成なて居ゐるとの噂うわさ、それ聞きて、と思おもひ切きりました、又またなせよ、一旦いつたん人ひとも遣やたれば、捨すてたも同前どうぜん、我子わがこながらも義理ぎり有物あるもの、今いま其恥はにかみが身上みづかみがよいとて、尋たずないて箸はしかたし貰もらふて、人間にんげんの道みちが濟すませぬ、今いま出合であ合あてもわか、の他人たにん、子こといふ、此娘このむすめ一人ひとり、それも尤もつと其兄貴そのあにき、今いまいくつぐらいじやの、かかうつてうと今年ことし廿八にじゅうはち、鎌倉かまくら八幡宮やっぺんぐうの氏地うぢの生れ母ははの名ないどよと書付かきつけ、守り袋まもりふくも入いて遣やました其後そののち、此こおよねを産うで、かゝも相果あいは、則すなはちけふが命日めいにち、

で孝行^{かこう}お娘^{むすめ}が水手^{みづたへ}向^{むか}花^{はな}の立方^{たてかた}ころおやつて下^{くだ}さりませと、何心^{なんしん}なき咄^{はな}しの合紋^{あひもん}、一^{ひと}胸^{むね}よこたゆる十兵衛^{じゅうべゑ}、思^{おも}ひ合せば覺^{おぼ}有^{ある}扱^{あつ}ひ、産^{うみ}の親父^{おやぢ}様^{さま}血^ちを分^わた我妹^{われいもうと}が貧苦^{ひんく}の有様^{ありさま}、有^{あり}合せた路用^{ろよう}の金^{かね}、なま中親子^{なかつくし}と名乗^{なをのつ}て、受^{うけ}ぬ氣質^{きしつ}を何^{なん}どがお金^{かね}の遣^{やり}たい屈託^{くつたく}、胸^{むね}を痛^{いた}め、親^{おや}仁殿^{にだん}何^{なん}と物^{もの}に相談^{さうだん}おやが、此娘^{このむすめ}をわらし、下^{くだ}されぬか、奉公^{ほうこう}又^{また}上^{あが}ますのか、イヤまだ女房^{にようばう}のあい男^{おとこ}、利發^{りはつ}な娘^{むすめ}は、商人^{しょうじん}の噂^{うわさ}、極上^{ごくじやう}の羽二重^{はふたへ}地得^{ぢとく}心^{しん}して下^{くだ}さるなら、仕拵^{しごしら}へ、こつちから、旅商人^{たびあきんど}の事^{こと}なれば、呼迎^{よびむか}へる日限^{にちげん}、まだいつ共^{とも}定められぬ、嫁入^{よめいり}の拵^{しごしら}へ料^{りやう}、爰^{こゝ}又^{また}少^{すこ}し持合^{もちあ}はす、是^{こゝ}において逝^いまする得心^{とくしん}かいのどふでござんす、コレよい女房^{にようばう}、面目^{めんめく}ないが最前^{さいぜん}から、わゑやこな様^{さま}又^{また}惚^ほたわいのとゑなつきかければ、ついと退^{しりぞ}き、様^{さま}あのお方^{かた}もふ逝^いして下^{くだ}さんせい、かゝ貧^{みづ}しう暮^{くら}して居^いる迎^{むか}あななめ過^すた、あほうらしいと、打^うてかゝりし腹立^{はらたち}顔^{がほ}、又^{また}嗜^{たし}めよい女房^{にようばう}と云^いれるが、何^{なん}の夫程^{それほど}腹^{はら}の立事^{たちごと}、我^{われ}が器量^{きりやう}

がよい故じやと、おりや嬉し^{うれ}い、イヤあなた様よふは深切^{しんせつ}な惚^ほさしやつて下さりました、シャガ此およねの女房といふてのやられぬ譯^{わけ}がござります、そんなら亭主^{ていしゅ}が有^{ある}のか、是い、實^{じつ}に只今のほんの座興^{ざきやう}主^{ぬし}の有人^{ある}共存^{ぞん}せず麗相^{れいさう}ゆた、眞平^{まっぺら}は免^{めん}れ預りませう、コレ娘は、機嫌直^{きは}して貰^{もら}ひまゑよ、ア、痛入^{いたみ}たお詞^{こと}、ほんと思へば在所^{ざいしよ}者を、おなふりあさるを眞受^{まうけ}ましてお耻^{はづ}かしやと莞爾^{にっこり}と笑ひよ心打解^{こどけ}て、咄^{はな}し紛^{まぎ}れてすつぷりと日の暮^{くれ}て有^{ある}氣^きが付^{つか}なんだ三日月様が上つてござる、宵月夜^{よいい}で行燈^{あんどう}の入^いぬ、明^{あか}しを伽^{てが}まして辻堂^{つじどう}の雨舍^{やば}り、お客様ももふお休足延^{やすみ}すと壁^{かべ}につかへる奥座敷^{おくざしき}緩^{ゆる}りどちいかまつては寢^ぎなりませ、私^{わし}此臺所^{だいじょう}ゴリヤ娘^{むすめ}のそちらに寢^ねい、旦那様のお堅^{かた}いけれど、時のはずみては主^{ぬし}の有池^{あるいけ}へ踏込^{ふみこみ}なさりよもえれぬ、用心^{ようしん}よ網^{あみ}を張^はえや、今夜^{こんや}おれが股引^{もひき}をはいて寐^ねや、むさけれどあなたよ、わしがどんざを裾^{すそ}よなど、追風^{おいて}もてくる鐘^{かね}の

こへいとえん／＼と聞へける、およねの一人、物思ひ心よかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理も隔られ、秋の螢の消殘る、佛壇の灯もほそ／＼と嵐よふつと氣の付娘、奇妙も治つたといふ様のあの疵、今でも敵の手がしるしが知てからあの病氣では思ひも寄ず、と心で黙頭胸をすへ、灯の消たるの天のあたへ、夫の爲と拔足さし足探り寄印籠取上立退足、つまづく音も目覺す十兵衛思はず高聲、何者と裾をどらへて引とむれば、わつと泣入娘の聲、平作も胸りし、起上てもまつくらがり、およね、／＼と云つゝさがす、竈の埋火付木もうつし顔見合せ、娘玄やないか、且那樣か何故も此有様、何の因果で此様な情あい氣も成たぞいやい、此親の、其日ぐらゐの物じやけれどな、人様の物もじきなか、盗もと思ふ氣の出さぬいやい、と親の顔迄穢しおつたとわつと計り、泣居たる、十兵衛の氣の毒、顔金銀を取たといふでいなし、是も譯の有そふな事

ど、問れておよね顔を上耻かしながら聞いて下さりませ、様子有て云か
かせし、夫の名のすされぬが、わたし故に騷動起り、其場へ立合手疵を負
一旦本腹有たれど、此頃いまきり又痛いろく介病盡せ共徴なく立寄
方も旅の空、此近所では養生長しい間、路銀も盡、其貢も身の廻り櫛笄
迄賣拂ひ、最前もお聞の通り悲しい銀の才覺も、男の病が治したさ、先程
のお咄し又金銀づくでいらないとの噂、燈火の消しより、ア、妙藥をどうが
など思ひ付しが身の因果どうぞお慈悲、是す、今宵の事、此場切か年
寄れしお前、迄苦勞をかけ、不孝の罪、けふや死ふか、翌の夜は、我身の
瀬川も身を投てど、思ひし事の幾度か、死だ跡でもお前の歎きと、一日々
らし又日を送るとふぞお慈悲、了簡と東育の張もぬけ戀の意氣地
も身を碎く心ど、思ひやられたり、歎きの端くつくくと聞取十兵衛
姉はそんならてなさん、江戸の吉原で全盛の、松葉屋の瀬川殿じや

の、ハイ、チモ、ようは存じ、すりや瀬川殿の夫の爲、ムクと心の目算思案を極め、イヤ、太夫殿夫の手疵を治す藥、ほしい、尤、それ聞て、進せたい物なれど、是、人の預り物、此事、思ひ切つゑやれ、今、こゝた衆の咄しの通り、わしも又恩を受た、其恩を受た人の爲、いづれの寺でも苦しうないが、石塔一つ寄進が仕たいが、何と世話して下さるまいか、夫、は寄特結構な寄進でござります、何時成共お世話致しませふ、私も來年、かゝが年季勤むる功德俱、成佛とやら、是非お世話致します、ずるでござります、どうぞ今度の下り迄、違ひぬ様、頼ます、兼ての願ひ、書付も此内、委しふござる、金、一包取出し、必頼んだぞや、親子の衆、最早夜明、間もなし、随分無事、親仁殿と立出れ、平作も必お下り待ます、姉はさらばとばかり、よて、心、一物、荷物の先へ道を早めて急ぎ行跡、親子の顔見合せ、金取上て、コレ、およね、随分大事、かけておきや、夜明迄、間も有、そなた

も休みやど水いらす、見廻す傍又落たる印籠、是は今の旦那のじや、定て尋てござるで有と、いふよおよねが手又取て此印籠はどうやら覺への有模様、合點の行ぬ、それか是かどよく、詠め、それよこりや澤井股五郎が常く持し、覺への印籠、不思議など平作も金取出しよく見れば、金子三拾兩此書付、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、稚名の平三郎、母の名はおとよ、我子又付て置た書付、そんなら今のお方の私が爲ふ兄、我子の平三で有たかいそんなら最前からの深切、それといはず此金を貢でくれた石塔代、不思議の縁と親と子は暫し、あされて居たりしが、およねの印籠手又取て、裾合せ折てかけ出す、待娘どこへ何處へといと、此印籠を持て居る、其兄の敵の手がしり、追かけて股五郎が有家を尋ね志津馬様へ、尤じや、が我ではいかぬ年寄たれ共此平作、理を非は曲ていはして見せう、我も續いて跡から來い、どの

様な事が有てもな必出なよ、敵の有家聞迄、大事の場所、木影も忍んで
立聞せい、必とも鹿忽すあ、合點か本海道の廻り道三枚橋の濱づたひ勝
手覺へし拔道をと、子故も迷ふ三惡道轉けつまろびつ走り行跡もおよ
ねの身拵へ、續いて出んとする所へ、折柄來かゝる池添孫八瀬川様か孫
八殿、よい所へござんした、今夜爰も泊た客で、敵の手筋が知れそふな、詮
議の爲も吉原迄、とゝゝが行まやんした、い、忝あい、其行先、吉原迄の
よも行まい、何角の様子、道もて聞んど、瀬川も續く池添も足も任せて、
「またひ行實人心さま」も町人なれ共十兵衛、武士も及べぬ丈夫の
魂夜深も立し獨旅、千本松もさしかゝる、ち、いと杖を力も息すたゝ、
「さゝく旦那樣、さゝくお早い足元、」今呼だのこなたかあんだゝしう何の
用、い、只今のお金を、戻しと參じました、石塔料と名を付て、大まいの金子
三十兩、其日暮しの蜘蛛助も下さるもも譯が有、又請まするもも譯が有、

けれども、此金を請まして、去人が立ぬ義理がござります、是をお返し
します代り、あまたはお頼がござります、お聞なされて下さりますか、
一夜さ泊るも何ぞの約束様子も因て頼れまい物でもないど夕闇の
夜の聲えるべ跡々窺ふ池添瀬川かたづを呑で聞居たる、其頼の様子
は、いふつゝやつて下さりませ、此印籠の主の有家を承りたふござり
ます、是を尋て知たい計は、さすの流勞致す人、それ故娘も廊を出て、
憂難是が知ると本望成就、娘もつれて私迄、此上の悦びのござり
ませぬ、二十や三十のはした錢で、露命をつなぐ私が、死る迄安樂も暮さ
れる程の三拾兩、其金銀もかへてのお願ひ、七十も成て蜘蛛助が子も叶
はぬ重荷を持それのまだ休みもする、子のかわいひといふ重荷の寐た
間も休まぬ一生の苦痛を助る薬の名お前様も親は有る、子故は愚
痴も成物じやと思ひ召やられて、願ひを叶へて下さりませ、コレは旦那様

ど、血筋ちすじと義理と道分みちわけ石、わけて血の緒をの三界さんがいは、踏迷ふみまよふこそ道理なれ親
の心を察しやり、聞、そふ有ふ、心底しんてい至極しごく尤じやが是計いどうも云れぬ、お
れも頼たのまれた男づく、其方の人が太切たいせうなら、こつちよも又太切、譬たとへ又有家ありかを
聞ても、命がなふてい本望ほんぼうい遂とげられまい、そつちの内は落して置た、主の
ない印籠いんろうの、其妙藥で疵養生達者きつやうじやうたつしやも成た其上でい、望の叶ふ時節じせつも有ふ、
親仁殿しんにだん、さそふじやないかど心のかけで一重明ぬ十兵衛が、情の詞ことば、そ
れ程は慈悲じひの有あるお方、逆さかものとあら其藥の持主もちぬし、イヤサ、悪い合點がてん此藥の持
主い其病人とい大敵てきやく藥、三十兩の其金敵の恩を受まい爲、戻したでいな
いかいの、此持主の名をいへば、敵の藥で疵本腹恩を請ていませさかの時、
切先きりさきがなまらふぞや、やつぱり拾ふた藥として心置こころをまなふ養生やうじやうさしたが、
よさそふと思へるゝと、聞て平作感かんじ入い、聞、そふじやあつた、エ、お前様い、
恐ろおそまゐ發明はつめいなお人じやの、そふ聞ましていす様もござりませぬ左様

ならもふ歸りす。まよ、旦那様、おさらばと云つゝ探つて十兵衛が脇差拔
取腹へぐつと突立る。ヤアくく何としたく、ミヤ、自害か、何故又誰を恨で勿
体なやど、うろく涙驚く娘聲又手當る池添が泣音どいむる響虫草又
喰付泣計、平作苦しき目を開きありやこなたの手よかゝつて死るのじ
やないのく、ハチこなたとわれとの敵同士、志津馬殿又縁の有此親仁を
殺したれば頼れたこなたの男の立、コレく此上の情より、平作が未來の土
産又敵の有所を聞して下されいの外又聞者誰もあい今死る者又遠
慮の有まい、不思議又始めて遇た人、どふした縁やら、我子の様と思ふ物、何
のこあた又引氣取らず様な事此親が、此親仁が致しませうぞ、是が一
生の別れ、一生の頼み聞ず又死で迷ひますないのく、コレ拜ますく
旦那殿と、子故の聞も二道又わけて命を塵芥須彌大海よもまさつたる、
誠の親又始て逢、名乗もならぬ浮世の義理、孝行の仕納め、どこも誰が聞

て居まい物でもなければ、十兵衛が口からいふに死で行こな様へ錢別
今際の耳よふ聞つしやれ、股五郎が落付先、九州相良、道中筋、參州
の、吉田で逢たど、人の噂、忝いくく聞たか、イヤ、誰もないく聞た
に此親仁一人それで成佛仕ますの、名僧知識の引導、前生の
狀子が介抱受思ひ残す事、ない早ふ苦痛を留て下され、親子一世の逢
初の逢納め親仁様、兄、顔が見たいくく顔が見たいわいや、南無あ
みだ佛、なむあみだくく唱る十念十兵衛が、こたへ兼たる、悲歎の涙、
始終窺ふ池添が小石拾ふて白刃の金合す火影、親子の名残跡、見捨
て別れ行

○第七 關所の段

藤川の新關と人よ云ど影の郷一村籠る松影、茶屋の娘のお袖とて、
年々二八の跡や先まだ内證、白齒の娘、雪氣いとぬ寒空、水の出花

や煎じ茶の佛をだしと參詣人、黒谷の上人、鎌倉へ下向の道、山中の法僧寺、よけふで三日の御逗留、御符は札のお影、よて、瘡が物云ふ、聾が治る、膝行のお祖母が禮參り、御禮參りの三人が、茶屋の床、又腰打かけ、何と太郎兵衛きつい人、群集の、扱皆聞えやれ、は符のお影で奇妙な事がござる、吉田の宿の、搗栗屋といふ炭屋の子が、痘瘡で目が潰れ、何が一人子の事故夫婦の衆が、發心して、罪亡しと西國へ出る所へ上人様の、立寄、何が符を戴くやら聞しやれ、其夜から目が明ましたといひの、それから吉田中が、ひつくりかへし、山中がお泊り、故毎日の參詣人有がたい事でないか、へそりや其筈いひの、炭屋の子なら黒谷様、又は縁が有、へ、こちらも逝で縁の有、かゝが焚たは符を戴きませうと、打笑ひ我家へ歸りける、父の教を守らざる其罪科の降積る、雪氣の空もいとひなく姿を、略す和田志津馬敵の行衛知ざれば、空しく過る光陰のやたけ、又心關所前

コレ姉様最前々此茶店で待合す躰の人の見へなんだか、イエ、左様なお方の見受ませぬ、然らば暫しと腰打かけ、姉様此遠目鏡の往來の慰みか、イエ、く慰みでいゝざりませぬわたくしがとく様の、此關の下役人、若切手なしは拔道を通る人が有ふかと、吟味の爲の此目鏡と、聞て志津馬が心の當惑差當つたる切手の用意、ホテ、どうがなと思案顔、お袖の一心志津馬が顔、よい男と思ひ初云たい事も、娘氣の口へ出兼る茶の花香顔を詠めて、汲手元、脇へ流すも氣もそゝる茶碗計を手と持て差出す心の思ひく、汲で知かし目遣ひも、相手は藝氣が有べこそ、是にきつい馳走、餘り茶は福が有然らば今一つ迎もの事、ほんまの茶を、いくつもく吞たいと思はぬお茶の拾詞、お前故なら何度でも入花を上たいと何と云寄方もなく顔の上氣の初紅葉男の潔粹一森と戀の出花と見へよけり、志津馬も扱いと心付、我も心をかけしこそ幸切手の手がくりと、心で黙頭す

り寄よて、調お娘ななみ頼たのたい事が有ある何なんと聞きてくれる氣きかと、思おもふたつぽへ和ならかよ、云いかけられて返へん答とうの、詞ことばも詰つまるが女子じやうしの情じやうせん、何なんと返へん事の云い様ようも、わたくしもお前まへも頼たのがサどの様ような事ことなりと頼たのと有ある引ひかせぬ、お、忝かたじけなくい、わたくしもお前まへ故こならバ、どの様ようなお頼たのでも、いとひかせぬと寄よ添そへバ、それ聞きて落おち付ついた、何なんを隠かくさん我わが身みの上うへ今夜こんや中ちゆうも此こ關かんを通とほらねバ我いち一いち命めいよかゝる事こと。こなたの覺おぼし拔ぬ道みちを何なんとぞ教しへて貰もらいたい死しんでも忘わすれぬ、おし頼たのむと、色いろで仕しかける我わが身みの大事だいじぞつとまむればまめかへし耻はづかしいやら嬉うれしいやら抱だ付たてゐまめかゝす、袖そでの人ひと目めの關かんの門かど暮くれ六むつからは通つう路ろならずそれ迄これも私わたしが働はたらき、若もし間ま違ちがハわたしがお供ともし立たち退のかん、必かならず氣き遣づかひ遊あそバすなと思おもひ合あはる他た生しやうの縁えん二人ふたりが望のぞみ二ふた道みちの、一ひと筋すぢ道みちを、急いそぎの道みち中ちゆう狀じやう箱はこ刀たうも括くり付つけ通とほりかゝればお袖そでの呼よび留どめ、お飛ひ脚きゃく様ようお休やすみど、いへバ奴やつが立たどまり呼よびがけられて姉あね様ようも耻はづかししてよいものか、まだ八やつゝの間まへも有あるバ

一づくせいと腰打かけ。えんどや、やお客様御免なされといへど志津馬も何氣なふお飛脚はどれからお立、イヤ下拙の鎌倉扇が谷の四つ辻切通し、夜前濱松泊り日が短くて漸爰迄と、聞か志津馬の心當りだまして問んど傍ろ寄、扱く早い事、私共の何として、浦山しい足元と、咄しを盪茶の出花、一目見るの餘念なく、お袖が傍ろぐよやと成、忝い白齒娘のお初穂、一口吞す氣のないか、一目見るから戀茶と成た、奴殿惡ちやり置んせ、ちやい、どちやい入まい、こちやすつとほんのこつちや、コレ、くそつちや向まいどうちや、去どの貴公も顔も似合ぬやつし形、名の何と云ます。身共が名の助平、イヤもふ飯も好物だてや、コレお娘どう仕てくれる、エ、えやら、どそんな事より此様お面白物見る氣のないかと目鏡の傍へ突やられ助平の差覗き、面白いと詠め入、大勢人が見ゆる、向ふよ見へる、あれ、おれ、おらが仲間の頭

だ、コレ頭何ぞ用ひないか、何じや金比羅様の挑灯も有、川が見へる、何じや藤屋の二階で客が樂しきみよる、三味事、ハアあの女の見た様なうれだ、わどやあきのでないかと、一目見るより屹相かへ、儂のうれうもおれも退狀おこしうこゝ樂しんで居るな、コリヤ云かいした事忘れいせまい、旦那へ願ふて奉公引し女房も持と思やこそ春からも壹歩遣三步やり四歩遣る女房じやと思やこそおらが切米打込で遣たぞよ、コリヤ其折おらは何と云た、お前ど夫婦も成て夜も晝も樂しもといふたじやないか、それ何だ、我見る前で尾籠千万其男と抱れて寐るか、よくもおらを欺したな、鎌倉で人も知たる、澤井殿の家來澤井助平もふ了簡か成ぬわいとかけ出せしが、ハア今のは何所だ、何だ何よも見へないコリヤぞふだど、いふもお菰がさし覗き、吉田の茶屋の二階爰から一里も有所腹立たさるだけが損もふ了簡なされ、いか様言べ一理有遠方から怏氣

するハ聾^{つんば}耳^{みみ}どうするハ同じ、どの言ながら残念^{ざんねん}と又差^さ覗^{のぞ}き現^{うつ}成^{なれ}、
是幸^{さいわい}扱^いハ澤井^{さわい}の家來^{けらい}よなど、志津馬^{しづま}の邊^{あたり}ハ氣^きを付^つて狀箱^{じやうばこ}の封押切^{ふうおしきり}一通^{いつづ}
奪取^{うばい}元^{もと}の如^{ごと}くハ直^ちすのも、知^しぬ助平^{すけへい}一心^{いつしん}不亂^{ふらん}打眺^{うちなが}め、エ、^聞口^{くち}中^{ちゆう}を契^{ちぎ}りを
る、こりやもふ堪^{かん}忍^{にん}ならないとお袖^{そで}が腰^{こし}を力草^{ちからぐさ}、エ、^聞放^{はな}して下^{くだ}さんせ、何と
是^はが放^{はな}されう、ハアくと古木^{こも}の如^{ごと}く、まやちぱり返^{かへ}り横^{よこ}もどつさり朽木^{くち}倒^{たふ}
し、登^{のぼり}詰^{つめ}たる奴風^{やつふう}巾糸^{きんし}目^めの切^きしごとくなり、傍^{そば}ハ落^{おち}たる紙入^{しゐり}の、中^{ちゆう}より出^で
る關所^{せきしよ}の切手^{きて}、見^みろよお袖^{そで}ハ飛立^{とびたち}思^{おも}ひ、嬉^{うれ}しいやら強^{こわ}いやら結^{むす}ぶの神^{かみ}の
此切手^{このきて}と、志津馬^{しづま}ハ渡^{わた}せハ懷^{くわい}中^{ちゆう}し、我身^{われみ}の難義^{なんぎ}ハ遁^{のが}れたが、かうして置^{おか}れ
ぬ奴殿^{やつてん}、コリヤ虫腹^{むしはら}ハ癩癩^{てんかん}病^{びやう}か、コレ顔^{かほ}へ其水^{みづ}吹^ふかけたど、いふよお袖^{そで}ハ狼狽^{ろうたへ}て
洩返^{にへかへつ}たる茶釜^{ちやがま}の茶天窓^{ちあたま}へざつぷり打^うかくれハ恟^{びく}り氣^きの付助平^{すけへい}が邊^{あたり}り
見廻^{みめぐ}し起上^{おきあが}りさも苦^{くる}しげハ聲揮^{こゑ}ハし、ア、どなた様^{さま}か忝^{かたじけな}い生^{なま}れ付^つて恥^{せがれ}め
が虫早^{むしはや}く、時^{とき}くおこる疱瘡^{はうそう}子^こハ湯^ゆがかゝつて助^{すけ}つたど咄^{はな}せハ二人^{ふにん}ハ

顔見合せおかしさ隠す計なり、時も違へず關所より、打拍子木も助平が、
一つ二つと指折て、コリヤ七つの時かゝり大切の此狀箱一時も早くお届
やさん、關所の切手と紙入の内を捜せど、めんよふあ、南無三寶跡の茶
店で落したか、一走り立出れど、水氣取れし河童奴ふならくと、池
水のこみ逢たるごとくよて元來し道へ引返す、お袖の跡を見送りて、
此間より早ふと茶店の道具を門内へ運ぶ片手より顔詠め見飽ぬ目鏡の懸
男、志津馬の一心敵の手がより白齒娘が手を引、岡崎さして歸りける
鎌倉の奥女中お里歸りの道中ど、人目よ見せる銀乗物關所の前へ昇居
る、家來お傍へ立寄て、お關所でいへば暫く是より歩行と、聞とひとし
く戸を開き旅姿に身を省し兜頭巾より目計出し、昨日よかゝり勢も瀾瀾
と澤井股五郎邊り見廻し、駕籠の者太義で有た是を早く歸てたもれ。
林左殿の何してござるな、あれへ出でござります、お旦那のお先へ

か通りなされませ。木もかやも心置の世話人の志無足らせぬ我
心底譬我を付ねらへばとて何程の事あらん見付次第は返討わいらも
ちつ共氣遣ひすなど、家來引連打通る、此海道を住家とする蛇の目の眼
八、人喰馬は櫻田が手に入顔は先は立、蛇目、今咄した事男と見込で頼
むぞよ、何で有ふと見付次第は合點か、エ、親方氣遣ひはあんぢ、此蛇の目
か見入れたら一寸も動かまやせぬ、ハチサテ氣味のよいやつと紙入より取
出し、金子千疋手は渡し、當座のはうび納て置さ、エ、忝い、馬士は千疋とい
仕合せよしの此蛇の目、何で有ふと見付たら、皆撫ふする一とつはと祝
ふさい先林左衛門、晩の泊りで何かの事、えめし合さん、來いと、門内さ
して入相の、鐘諸共は關の門、門はつしとまむる音、宙をかけたつて政右衛
門、關所の前は立寄、門戸かためて出入もならず、暮時でわからねど、う
しろ姿は林左衛門は違ひなし、股五郎を同道は極た、エ、付込だ敵を

取逃せしか口惜やど、はがみをなしてみをもだへ門内を白眼付無念涙
よくれ居たる、それよ、志津馬と爰で出合約束但し先へ入込だか何よ
もせよ出合所の一筋道、今夜中又此關越ねば、最早敵の手に入ぬと行つ
戻りつ思案を極め、兼て聞居る拔道の儘、竹の林の中、押分行へ川づた
ひ、探り廻りしまつくらがり、うろく眼、助平が是も窺ふ拔道を、すか
し見れば雲つく様な大男、胸り驚き身を忍ぶ探り當りし政右衛門、竹藪
押分、忍び行、どつくと見届け助平が狀箱腰よくしり付、味いくと拔道
の跡を慕ふて「急ぎ行不敵成かな政右衛門、天一命投打て、目ざすも玄
らぬ眞の闇降來る雪の道踏分、裏道つたひ一丁計行よと見へしが、關所
の内よ聲高く、忍びの鳴子の音する、裏道を越る曲者有と、呼ねれば、そ
れ遁すなど捕人の人數兼て用意の高桃灯、人數を配つて取巻しの危ふ
かりける」次第なり、政右衛門の事共せず三角、眼を見開き、山を食する

猿松め、皮引ばいでくれんずと、だんびら引ぬき待かけたり、それ遁すな
ど組子共、一度よかゝる四方詰、イヤこまやくなど振ほどき付入所を宙よ
て切取飛くる、熊手を受流し切立く切立れば、詞よの似ぬ組子共、跡を
も見ずして逃ちつたり逃るを追ず政右衛門、道の案内の此挑灯と、勝手
登へし杣道の足跡あるべよまたい行、跡よかくれて助平の道の勝手
方角知らず、うろつく折柄取て返す組子共、それといふよも及ばいこそ
高小手よくくり付狼狽奴と夢よも知らず、組子の頭大音上、強敵の曲
者を、組子仲間へ生捕たりと引立てこそ、急ぎ行

○第八 岡崎の段

世の中の苦の色かゆる、松風の音も淋しき冬空や霞交りよ、降積る軒も
まばらの放れ家へ、岡崎の宿はづれ、百姓ながら一利屈主の山田幸兵衛
と人々心を奥口の障子隔て女房が續車の夜職歌、いとし殿を、三河の

澤よ、戀こひの棧かけはしみ杜若あざむき、更さらに忍しのぱい、夜よに八はちつ橋はしの水みづも渡わたさぬお手枕てくらひ鄙みづかも都みやと
も小娘こななの誰教たれをしへねど、戀草こひぐさを見初みそめ惚ほれ初そめ打付うちつけふ雪ゆきの夜道よみちの氣きさんじの互たがひ
ふ手先てさき折添そへる傘からかさの志津馬しづまふもつれ合あふ、じやらくら咄はなしいつの間まふ戻もど
るお袖わがやが我家わがやの戸口かど、まんき、いつもいづれ遠とほふ覺さへたふ、意地いぢ悪わるふ今夜こんやの
早はやさまだ咄はなしが残のこて有ある跡あとへ戻もどつて下くださんせぬか去迎さりとての譯わけもない日ひの暮くれ
る草臥足くたびれあし跡あとへも前まへへも雪ゆきの段鉢だんはちの木きの燒火やけびを暖あたなそもじの肌はだで暖ぬくめ
て貰もらふが馳走ちそう早はやふお宿しゆくを無心むしんどぢやれた詞ことばふどふいふて、よいか、
悪いわるいか白齒しらはの娘むすめ、聲聞こゑきこ付つて誰たれじや、アイ、かゝ様よう、わたしじやないな、
お袖そでとした事が、此寒このふせいのゝ何なんして居ゐやる、戻もどりが遅おそさふ待兼まちかねた、早はやふ這
入いりやど、母親ははの詞ことばを塩しほふ内うちへ入いり、どふ歸かへらふと思おもふたけれど道連みちづれのお方かた
が有あて、それで思おもはず夜よふ入いりました、道連みちづれのお方かたとい、アイ行暮いりぐした旅たびの
お方かたそれい、きついは難義とがんぎ、今宵こんや一夜ひとよのこちの内うちに留とどめて上あて下くださん

せ、や苦しうござりませぬこつちへお這入遊バせど、呼バれて志津馬の
おづくと、小腰屈めては赦されませ、獨旅の浪人者、日の暮る足損ふ
詮方盡て此お頼、近頃わりない事あがら、一夜のお宿をば無心ど、いふも
心よ荷物の葛籠お袖見る、すかゝ様ども様の旅葛籠あそこへ戻つて
有からぬ、親仁殿もけふ暮前歸らしやつた旅草臥で寐てじやないの、
遅ふても大事な、早い事やど其跡の、言ぬ色目を見て取母、日頃か
ら二親がちよつと出ても、戻りを案じる孝行なそなた、どふやら不興な
顔持のかたい爺の氣質故折角お宿を借ませふとお供仕やつた道連
様へ、約束が違ふかと案じ過ての事で有ふ、譬爺の心得でも、此母が不
得心なせどいや、今でこそ茶店の娘、去年迄の鎌倉のお屋敷方へ、必奉公
の主人様のお差圖で、去武家方へ末く、縁又付ふと堅い約束其言號
の夫を嫌ひ無理隙貰ふて親の内へ戻つて間もあふみだらが有て、以

前のお主計じやない顔にしらねど約束仕た智殿へ、どの顔さげて云譯せふ、サア斯いふにいふ物のそなたも限り、そふした事の有まいけれど、時分の來た若い娘の有内へ若い男一夜の愚半時でも、ひとつ所も寐伏せバ戸に立られぬ人の口、其上連合幸兵衛殿、國守方のお目がねえて、新關の下役を勤さつしやる今の身分常の百姓とい違ふて、物事を正しうするも役柄故、必惡ふ聞やんなやど、いねれて何と返事さへ、お袖が異見の相伴ふ、志津馬も手持投首を、見る氣の毒さ母親も、さのみいにかゝと何氣なふ、此様は異見するも轉バぬ先の杖とやら、イヤは浪人様、お心よさへられて下さりますな、泊ます事ならずともせめてお茶など入花を一ツ上ふと尻輕は勝手へ行間待兼て、娘のおづゝ志津馬が傍、誰も來ぬ間云殘した、咄しの殘りを納戸でと、取手をすげなく振放し、見る影もない旅の者、關所での情といひ、道すがらもわた嬉しい詞を誦と思

の外、云號が有からぬ主有花も落花狼藉密夫など重て置いて、モウ四つも
間も有まい、夜の更ぬ中宿取て、寝て花やろと立上る、袂も縫りこす、あつ
て過たる縁定め、今更どやかうかゝ様の、今の詞がお心よさいつて私へ
當言を無理といさらし、思ひねど恥かしながらけふ迄も、殿は又惚た
といふ事知らぬ、あどないふつゝいかな、在所育の此身でも結ぶの神の
は利生で、お顔見るから思ひ初どふぞ、女夫も成たいと胸の玄がらむ白
川の關へ越てもこへかぬ、戀の峠の新枕、かゝる中へ又賔欲な、つれな
い事をいふ手間でつい可愛と一口も云れぬかいなどすがり寄、玄ども、
涙のかこち言、岩木ならねど追ふも、振拾がたき戀の蹄かゝる折から門
口へ、いさせき來かゝる蛇の目の眼入、お袖の目早く一間の内、無理も志
津馬を忍べて何氣ない顔、入口から羞恥いて、味いぞく、毛虫の親仁
や母者の居ず、お娘一人の無い圖な首尾と這入やいなや後から、帶際ほ

ふと引^{ひん}だかへ、常^調から目^め顔^{がほ}で知^ししてもびんしやんく、驛^{はねまわ}廻^{まわ}る馬^{うま}方^{かた}おれ
が太^た鼓^このふち立^{たて}塙^はで驛^{驛しゆく}驛^{しゆく}見^み付^{つけ}た様^{よう}も、さんばい仕^し兼^{かね}て居^ゐるいの、いや
おふあしもちよこく、と撃^つでふくれとえあだるれば、^調機^きあいうるさ
いゝやらしいと、突^つ付^{つけ}られても押^お強^つく、誰^{たれ}でも初^はてのいゝやく口^{くち}でい
云^いが、かさ汁^{じる}と色^{いろ}事^{こと}の味^{あじ}覺^をへてから止^やめられる物^{もの}じやないで、それ共^{とも}いや
ならおれも意^い地^ぢじや、今夜^{こんや}藤^{とう}川^{がわ}の關^{かん}所^{しよ}を破^やつて、忍^{しの}び道^{どう}を通^{とほ}たやつ、召^{めし}捕^{とら}
よふと岡^{おか}崎^{さき}中^{なかつ}の上^{うへ}を下^{した}へと詮^{せん}議^ぎのどふ中^{うち}胡^こ蓋^{さい}なやつとの相^{あい}合^あ傘^{がさ}ちらり
どつないだ此^{かん}眼^{がん}八^{はつ}灰^{ぐい}汁^{じゆ}で洗^{あら}ふた蛇^{じや}の目^めが詮^{せん}議^ぎ、ほへ頬^ほかしくしてこまそ
ふとかけ入^い向^{むか}ふへ立^{たち}ふさがる、お袖^{そで}を突^つ退^{たい}立^{たて}切^{きり}し、障^{しょう}子^し引^ひ明^{あけ}見^みて恠^びり、こ
りや違^{ちが}ふたと狼^{ろう}狽^た眼^{がん}、かけ出^です蛇^{へび}の目^めが利^き腕^{うで}捻^{ねじ}上^{あが}立^{たち}出^でる主^{あるじ}の幸^{さい}兵^{へい}衛^ゑ、百^{もも}
姓^{せい}なれど新^{しん}關^{かん}の下^{した}役^{やく}をも相^あ勤^{ごん}る、身^み共^{とも}が居^ゐ間^まへ、泥^ひ脾^{すね}を切^{きり}込^こみ狼^{ろう}藉^{せき}やつつ
簡^{けん}ならぬ所^{しよ}なれど、所^{しよ}存^{ぞん}有^{ある}故^ゆ敵^{てき}してくれる、此^い以^と後^ごきつと嗜^{たし}おらふと、投^なげ

付らるゝと思の外、突放したる手強さ、底氣味悪くうぢくもぢく
見るゝお袖が嬉しさど、いとしい人の納まりを心一つよとやかくと、案
じ彌増思ひなり弱みを見せぬ悪者根性、おいへよべつたり上股打役目
役目と云るゝが、其大切な關所をぬけた、科人を吟味する最中に爰の娘
が連て戻た旅の侍、引込で置ながら、詮議する此眼八、なせえめ上て手ご
めよしたのじや、と娘が連立歸つたど、其侍は何國も居る、ヤア慥さつき
よ爰の内へ、だまりおらふ、お袖ようつほれ最前の法外の有様、承引せぬ
故無法の當推、よし又其侍とやら此内へ來たよもせよさ鎌倉通行の東
海道數限りなき旅人の往來是ぞと云べき證據もなく、侍とさへいへば、
悉引とらへ關破りと云べきか、勿論儕の當所の馬廻誰赦しての詮議呼
はり、長居ひろがぱくし上り地頭へ引立ふか、何とくときめ付られ、
やうゝお氣の短ひ、商賣が馬方だけ、豆から發たいざこざで、親仁様の

襲所迄、踏馬に免とへらず口跡をも見ずして逃歸れば、跡見送りて落付娘忍ぶ志津馬も一間を立出覺なき身又關破りと、今の危難を免れしに、は享主のは厚志故、忝なしと手をつかへ禮の詞より是に痛入先くお手を上られい、ひらく承れば、浪人とあ定て仕官のお望で上方へござるのかい、イヤ様子有て世を忍ぶ獨旅、則當所岡崎まで山田幸兵衛殿方へ密に参る浪人者と聞て不審の眉に皺、其山田幸兵衛とい身兵が事、其元は何方から、貴殿が幸兵衛殿とな、拙者の鎌倉の昵近武士澤井城五郎殿は縁有者、委細は是と藤川よて手に入一通手は渡せば、封押切て老眼又つづく讀も口の内、様子知ねば氣遣ふお袖、幸兵衛とく讀終り、某が性根を見込、和田行家を討て立退澤井股五郎が力と成てくれよと有、お頼の書面此趣先達て鎌倉の様子承りし砌は待と待たる此お頼、承知仕た、遠途の所は太儀、此使を勤らる

る其元ハ、城五郎殿のハ家來かど、尋る詞ハ敵の手筋是幸と氣色を正し
幸兵衛殿のハ懇切承る上からの何をか隠さん某こそ、刀の遺恨止事
を得ず和田行家を手まかけし、澤井股五郎とす者さ、ハ自分股五郎殿
かいかゝも左様鎌倉出立致せし折ハ、澤井殿ハ附人も數多有共、人目立
もいかゞ存じ、別れゝ罷登る、城五郎殿ハ前もつてハ懇意の幸
兵衛殿、何とぞハ助力下さらば、此上もなき拙者が悦び、ま、さすれば貴殿
が股五郎殿か、是ハ存寄ぬ、是迄互ハ意得ねば双方共ハ知ぬ同士
コヤ娘云號の智殿じやいやい、ま、そんなら私が鎌倉へハ奉公の其中ハ
城五郎殿のお勸故、其方を遣はさふと面談ハ及ばねど約束致した
花笠殿、よふこそ尋ねて下されたと、悦ぶ聲の浪聞へ、母も立出、ヤレく思
ひがけない、こな様が笠殿で有たかいのふ、ま、たが氣ハなへて下され
な、云號ハ有ながら、股五郎と云名を嫌ふて、今迄娘が不得心、それ故疎遠

又打過うちすぎました、聞たきと違ふてちが、よい男、此様な智殿でも、そなたのやつぱりいやかいのふふ、勿もつ躰たいない事云しやんす云號いふあひけの殿どのはじやと、今の今迄まらいでさへ、添そひたふてならぬ物、縁きつの切てもお主のお差圖さしづ、どく様やか様のお赦ゆるしの出た股五郎様わたしが何の嫌きらひまえよ、二世も三世も替かわらぬ夫おつともふく是からどつちへも、やります事じやござんせぬ、いつ迄も爰こゝ居て、可愛かわいがつて下さんせど、心と思ふ有たけの言いわで思ひを押お包つみみ袖うでが嬉うれしさ二親ふたおやも俱ともまほたく悦よろこび顔思ひがけなき言號いふあひの噂うわさ、志津馬しづまの成程なるほど、上杉かみすぎも仕官の中、城五郎殿お差圖さしづよて、顔かほのえらねど言號いふあひけのお袖殿うでどので有たよな、一方ならぬ股五郎が一世いっせの大事だいじよ及およぶ時節ときばはかくまひ下さらば生なれ世よの厚恩かうおんとわざど其身みみをへり下り、詞ことばを盡つくし頼たのむもぞ、何なにが扱さくく狩人かりうすら懷ふところよ逃入にがひ鳥とりの助たすくるならひ、まして聲殿こゑどの違背いはいのない、年こそ寄たれ幸兵衛が命いのちよかけてかくまふかわり、

志津馬づれが付ねらふ共何程の事かあらん、去ながら爰の端近幸奥も別家も有べ、心置なく打くつろいで、女房娘希の珍客何のなくと盃の用意を仕やれ、アイヤ、其お心遣ひ返つて迷惑、ハチ智殿の他人がましい鼻入やら聲入やら祝言もこつちや煎の在所料理、みしり肴の舟盛より外も馳走の手いらすの娘のお袖が初物一種で、いかに様祖母の言やる通り敵持の聲殿も七十五日生延るとい、是も吉左右目出たい、案内致さふとおどけまじり、先立親の手前を恥らひて赤らむ顔の色直し解て、見せても下心、赦さぬ志津馬が肌刀、胸にねた刃を相の間の襖引立入よける、既其夜も、えん、と遠山寺も、告渡る早九つのかねてより、内の案内に知たる眼八裏から忍んで納戸口、思はず躰明がらの、駄荷の葛籠を幸とあたふた押明忍び込、鼻息もせず窺ひ居る、斯とい人も白雪の、道もいどの政右衛門、心も關の忍び道通れて、急ぐ跡方も數

多の捕人が見へ隠れしたふ足跡氣轉の唐木、兩腰そつと道端の雪掻集め押隠す透もあらせすばらく、腕を廻せと追取巻、子細もいらず理不盡、繩かゝるべき覺はないと云せも果ず双方、捕たとかゝるを引ばづし苦もあく首筋一掴み、一振ふつて右左、弱腰蹴すへて獨投透間を得たりと二番手が腕がらみを振ほどき、ほぐれを取て眞逆様頭轉胴骨雪道、打付られて叶ひじと、入替つたる三番手打込十てい、かいくり脾腹をてうど眞の常勵しき手練、さしもの組子、さうなくも寄付ず跡じさりする計也、見兼てかけ寄捕手の小頭、ヤア上意、よつて向ひし我、手むかいなす、關破りの浪人者、相違ない、腕を廻せと詰かくれば、鹿忽也、役人急用有て此ごとく夜道を急ぐ旅の者、丸腰の某を、關所を破りし浪人とい、身取て覺へぬ難題外を詮議なされよとちつ共恐れぬ丈夫の振舞、始終を見届幸兵衛の戸口をかけ出押、隔憚りあ

がらお役人へ上る關破りの詮議半深夜一人歩行の旅人疑ひ
の尤併此者の鎌倉飛脚子細有て此幸兵衛よく存じ罷有る慮外の段
の用捨有無難とお通し下さらば有がたき仕合と、かばふ詞は政右衛
門「さいふこなたい何人ど、いふを打消身は覺へあいもせよ、
お役人は慮外の手向ひ、不届至極と呵り付まづくと歩み寄倒れ伏
たる組子共引起して死活のいけいづれもお心慥なござるか、お役目
苦勞千万と、苦い挨拶氣の付捕人幸兵衛猶も威儀を正し、承られ
關所を破りし科人の帶刀の浪人者彼の町人此丸腰、憚りながら人違へ、かよ
ふな儀は隙取中、彼曲者を取逃さば詮なき事、早くお手當なされよと、
云れて實も捕人の小頭、其方が存せしと詞は相違も有まい、是を
山手へかゝり、彼曲者を詮議せん家來參れと引連て元來し道へ引返
す、影見送つて政右衛門「危ふき場所を通れしも全貴公の御厚志故お

體かまの重ねて、心もせけバ失禮しつれいながらお暇いとまと立上たてあがるを暫しばしと止め、昨今
なれど折入せりいてお尋ねたづね子細こさいもあれバ見苦くしけれど拙者せつしやが宅たくへ暫時ざんじな
がらど老人らうじんの、詞ことばに是非せひなく政右衛門然しかバ免めんと打通たうつうれバ門の戸引
立主たちぬしの幸兵衛、傍近そばぢかく差寄さしよて、多勢たふせを相人あいにんと今の働はたらき感心かんしんの餘あまり役人やくにんを
欺歸あざむきかへし、難義なんぎを救すくふの身共みどもが寸志すんし、それバ付つけても不審いふかしきは貴殿きでんの柔術正じうじゆつまさ
しく拙者せつしやが流義りうぎ又同じおなじき神影しんかげの極意ごくい手練しゅれんせられし旅人りょじんのどいぶかる
色目いろめ、こなたも不審しんみん神影しんかげ流の極意ごくいなりと見極きはめられし老人らうじん、ヘテ心憎こころにくしど
双方ふたうほうが、ためつすがめつ見合みあす顔かほ、と、お別れわかれとて十年餘あまり、相好さうがうの替から
れしが、生國勢州山田なまにきせしうやまだよて、武術ぶじゆつの指南さしなん下されし、要様ようさうではござりませ
ぬか、其詞そのことで思ひ出した、我勢州われせしうと有ありし節せつ幼少ようせうより育上そだてありし庄太郎せうたろうで有
ふがな、成程なるほどく、然らバあなたが其方が、是こゝと手を打うて、盡つぬ師弟しだい
の遠州行燈えんしうあんどう搔立かきたてく打詠うたがめ、稚顔わかしなと見覺有庄太郎みかくありせうたろうと相違さかない、健すこやかと

生立しあ、先生も堅勝で、無事の對面互に満足、去ながら、思ひ廻せば、過行月日、其方の山田の神職荒木田宮内が斃なれ共、幼少の砌父母は離れ孤となる不便さ、手塩にかけて育つる所、稚立に武藝を好む、未頼もしく思ふ、門弟共へ稽古の次手、一手二手と教ゆる中、一を聞て十を知、頓智といひ器用といひ、十五以下にて鎗術、劍術、鎖鎌、体術、柔に至る迄、諸歴の弟子を提拔、神影の奥義を極むる無双の達人、何卒大家へ仕官致させ、親の氏をも繼せんと心頼みと思ふ中、未熟の師匠と見限りしか家出致して十五年、便なれば折々觸れ此庄太郎のいかゞなりしと、雨もつけ、風もつけ思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄そちが樽、シテ只今の住所の何國有付とても、あらざるかと師匠の慈愛、政右衛門思はずはつと手をつかへ親にも勝る大恩の、師匠を見限り家出せしと、疑ひに去事なれど、常く武術の講釋、小耳も覺ゆる其中、一派の心を

凝さんより諸流は渡り修行をなすこそ。此道の心がけとて教訓、心魂は
まみ渡り十五才まで國を出、普く諸國を遍歴し、武術を磨く武者修行、天
運は叶ひ然るべき主取も致せしかど、生れ付たる好色者、乱酒は主人の
機嫌を損じ、只今の元の浪人、たよるべき方もなければ、若上方は有付も
やと、心ざして参る所、思ひがけなく先生は面目もなき對面と、うかつに、
それと身の上を言ぬ底意は白髪の母、様子聞てや一間を立出、庄太郎
か成人仕やつたの、連合の眼鏡は違ひぬ武藝の上達器量を見込で頼
たい子細が有と聲をひそめ、そなたの家出仕た時の、三つ子の、お袖も
ふ十七は成ひの縁有て言號の其智殿を、親の敵と付ねらふ者が有故、
まさかの時の後、力は成て下さらば、餘の人千人萬人も勝つて嬉し
う思ひます、いかにも、庄太郎と知ぬ先難義を見兼ね救ひしも、其義
を頼まん下心と、師匠の詞聞もあへず政右衛門摺寄て、其付ねらふ敵

の假名^{けな}、チ、聳^そといふの上杉の家來、澤井股五郎といふ侍、付ねらふに和田志津馬と聞た計面體^{めんてい}の知ね共、高で知たる若輩^{じやくはい}者、幸兵衛が片腕^{かたうで}も足ぬ相人^{あいて}、爰^{こゝ}又一つの難義^{なんぎ}といふにきやつが姉智唐木^{あねぢから}政右衛門といふやつ、音^{おと}又聞へし武術^{ぶじゆつ}の達人^{たつじん}、譬^{たとへ}五十人百人加勢有とて、政右衛門の及ばぬく、まだしも唐木又立合んに、其方ならで外もない、何とぞ聳^そよ力を添^{そへ}、助太刀^{すけだち}頼む庄太郎と、餘義^{よぎ}なき頼^{たの}又政右衛門、先生は内縁有股五郎殿又力を添^{そへ}れば少しの師恩^{しおん}を報^{ほう}する理^{ことば}り、いかにも助太刀仕らふ、此上^{これより}の澤井殿の隠^{かく}れ家へは案内とせき立唐木^{たつしや}忍^{しの}びの眼^{がん}入蓋^{をら}押明^{をしあけ}て差^さ覗^{のぞ}く影をちらりと見付る幸兵衛、心付ねば、ヤレく嬉^{うれ}しや、庄太郎の今の詞聞^{きこ}たからに千人力^{せんにんりき}、トレ^とく聳^そ殿へと立上るを、ハテ扱^あいらざる女の差出^{さしだ}、股五郎殿の行衛^{ぎやうゑ}の知らぬ^なハテ壁^{かべ}又耳有世^{みみあるよ}の諺^{ことわざ}、それと慥^{たしか}に知ね共、云聞^{いひきか}すに折^をが有^あふが、うかつよそれと明^あされぬ、咄^{はな}しの蓋^{ふた}は取^とぬが秘密^{ひみつ}と、どこや

ら一物歩行いちぶちあるきの小助、門の戸叩たふてすく、庄屋殿から急きうあけ用、只今出と
とんきよ聲こゑ、又開破あひらりの詮議せんぎで有ふ、いやといひぬ役目の不肖ふしやうど、云
つゝ羽織はおり引かけて、たしなむ大だち差こなす、腰こしもかゝみし海老鉈えびじやうを葛
籠づゝまつかど、女房おんな今も云た咄ふたしの蓋ふた戻つて来る迄明ぬ様心あけゝおろ
した此錠前じやうぜん合點がてんかど詞の謎聞めき女房も解とけやらぬ、雪道ゆきみちいどのぬ高足たかあし駄だ、さ
す傘からかさの骨組はねぐみも人ひとゝ勝すぐれし五調ごてう作り、あるきを先まづゝ幸兵衛さうべゑの心を「殘のこして
出て行い、戻もどらしやる迄寐ねられもせまい、糸績つむぎながら咄はなしませう、ハア今いまは
上根こんな事、マア火かゝお當りあされませ、私も是こゝから下男しも同前どうぜんゝ、お遣つかひなさ
れて下くださりませ、何のいひの、こな様なの大事だいじのお客きやく、マア煙草たばこ吞のんでゆるりつと、
寐轉ねころんだがよいわいの、イエく勿体もつたいあい師匠しせうの内うち、ホシ此煙草このたばこはどこから参
つた、シリヤ親仁殿しりやしんにが旅戻りくりゝ貰もらてござつた上方煙草かたがはたばこ、ハアあなたのお口くちゝ合
のなら、服部はつべか國分くにぶか、此天氣このかきゝ斯かして置おたら濕しめりまゑよ、留主事るすゝ刻きざんで

見ませう幸爰は切臺庖丁底は劔の葉拵へ敵を開出す煙草の小口葉巻
手早くきりくど大の體を小廻りの奉公ぶりも哀れなり外に音せで
降雪はむざんや肌も郡山の國に残りし女房の思ひの種の生れ子を抱
てはるゝ海山をたどりくゞて岡崎の宿々先は日暮て何國を宿と
定なくがいと轉ればわつと泣子をすかす手も冷氷る雪の蒲團は添乳
の枕いんのこくくゝゝ友さそふ犬の聲くゝ夜廻りの番が見付る小挑
燈ヤイク軒下は何で寐るのぞやきりくゝいけど呵られて、いゝくゝ私に秩
父坂東廻る順禮癢でお中を痛めまするちつとの間置まやつて順禮で
も幽霊でも在の中に寐さす事いあらぬゝ意地ばるゝ猶胡蓋者棒い
たゝくなと挑燈突付見るつまはづれの尋常さ白眼んだ眼うつかりと
細目ゝ明る戸の透間内から覗く夫婦の縁思ひがけなき女房お谷へッど
恠り差合せ包我名の顯れ口悪い所へ切かけた煙草の刃金胸を刻むと

人知ず、調見た所が小盗する風俗共見へぬ、此雪も乳呑子かゝへて難義
ぞや有ある何所ぞ後生氣な所を頼んで泊て貰もらいゑやれ、そ見れば見る程比
合なゑい女房、一人寐さすに殘念なれど、此方も寒氣もどぢられ、瘦畑の
鬼灯であつたら物を見逃す事と、謚つよやき歸るも頼みなき、人の詞もせめて
の頼、火影を力戸口は這寄、幼い者を連た順禮でござります、お情も今宵
一夜さ、お庭の端もと計めて癢しゆく、苦るしむ息切の、聲も主の涙もろく、い
としや癢持そふな門中も寐ていたまるまい、泊てゑんぞよと立て行、な
む三寶と裾引留、是は又は鹿相千万、此は觸の嚴しい中、殊もお役柄の
此内、何所の者やら知もせぬ、めつたは引入、跡の難いどふなさるゝ、急
度よしとなされませ、夜中も一人歩行女子、ろくな者じやござりませぬ
戸を明すとばい逝したたがよござります、いか様のふ、親仁殿の留主の中
の用心が肝心、こゝく旅人、いとしけれど一人旅を泊るには法度は城下の

中の軒のき下したも寝ねる事ことならぬ程ほども宿やどはづれの森もりの中なかへ往いて寐ねやえや
れと和やわかふ言いて引ひ出だす糸いと車くるま來こいと云いたどて行ゆれる道みちか道みちの四よ十五ご里り
波なみの上うへ、調とこへ行いても一ひと人り旅たびの泊とどめてくれふ様ようもなほはるゝの海うみ山やま
も、此こ子この顔かほを且かつ那な殿どのも、見みせたいと思おもふ精せい力りきで産う落めすから此こ已こ之の助すけ、漸しだ
忌いも明あく明あず國くにを立たてつゝいゝ一ひと夜よさ、家いへの下したで寐ねた事ことがなけれや身みの
ならわしと山やま寺でらの鐘かねがあれ寐ねる事こともして、星ほしの光ひかりを燈ともしび火びと思おもふて
寢ね入いれど今こん夜やのくらす、氷こほりの様ような此こ肌はだで、寢ね苦くるしいの道みち理りじやないの、殊こと更さら
寢ねで乳ちのはらず、雪ゆきも寒こひ雨あめもうたるゝ、つらさの骨ほねもこたゆれ共とも旦たん那な殿どの
や弟あにが敵たつねを尋たづねる辛しん抱ほうのまだゝゝゝこんな事ことで、有あるまいゝ、其かん艱ぜん難なん多く
らべてゐ、雪ゆきの愚おろ劍かつるぎの上うへも、寝ねるのがせめて女おんな房ぼうの役やく、氣きの張はり詰つめても此こ
癪しゃくの、重おもるゝ付つけてゐ、二ふた人りの身みも、勞つかれの病やまひが起おこりゝせぬか萬まん一いち悲かなしひ便たより
やなど聞きたら、何なんとせふぞいのふ、頼たの上うへるゝ觀かん音おん様やう弟あに夫おつとの武ぶ運うん長ちやう久きう我われ子こ

の命息災延命未練な事じやが私も此子を夫に渡す迄に生きて居たい、死
ともないで、傍に夫の有だとも知ぬ不便さ喰え、喉に熱湯内外の水
災の責苦雪みぞれ子を濡じ抱えめ、天道哀白雪の、積り重る旅勞
れ、瘡と寒氣よどぢられて、ど一聲氣を失ひ、どうと倒れし物音に、肝
こたへて南無阿彌陀なむあみだ佛も、口の内の何ぞと主の母、戸を
引明れば、ばつたりと、身ハ濡驚の目にとみたり、こりや眩暈がきたのじ
や、いの、エ、いぢらしやどうせうぞ、夫よ幸此氣付と、つかい文庫に用
意の藥、ア、ヤそりやは無用よなされませ、なぜいの、こりや親仁殿の道
中で持えやつた結構な氣付、サア其結構な氣付を非人同前の者よ吞して、
それでも氣の付ぬ時、かしり合ふ成ますぞへ、此儘としてほり出して、
お仕廻なされませ、えやといふてどふ見捨て成物、アレ可愛や乳を搜して
泣わいの、せめて此子を殺さぬ様、奥の火燵で燂て遣ませう、風よ當じ

と寢巻ねまきの縞しま、わかわかの他人たにんの慈悲ひ深く、比翼ひよくとかいす女房にようをむがり引出ひきだし戸かどを、引立ひきだ、奥口おくぐち見廻みまわし、さし足あしし、勝手かたの見置み置き釜かまの前まへ、付木つきぎの明あかり見咎みがめて、人ひとの何とかいひ柴しばを、そつと隠かくして門かどの口くち、伏ふしたる妻つま、氣きを付つける柴しばの焚火たきびの燠あたたまり、齒かみを割わつて、雪ゆきは濕うるす氣付きつけの一滴てきふ、耳みみは口くち寄聲よせこへかすめ、お谷やといふも憚はばりて、心こころの内うちで呼生よびいる夫おとこの誠通まことつうじてや、うんと一聲ひとこへ、氣が付つたか、コリヤ女房によう、ハア、マア、政右衛門殿せいゑもんどのかいのと、いふを押おへて、コリヤ何なんも云いな、敵てきの有家手けあてがしり、取付とりつけたぞ、此屋このやの内うちへ身共みどもが本名ほんなけふらいでも知しされぬ大事だいじの所ところ、そちが居ゐて、大望たいぼうの妨さまたげ、苦しく共ともこたへて、一丁南いっぺいなんの辻堂つじどう迄まで、這はふてなり共行ともぎやうてくれい、吉左きちざ右みぎを知しる迄まで、氣きをまつかりと張詰はりづめて必死しめるな、サア早はやふ行ゆくと、夫その詞ことばは千人せんじん力りき、觀音くわんおん様の御引ひき合せ、お前まへも逢あたひ人參熊膽じんじんくまのい、エ、忝はにかい、がぼん、いどこへ氣遣きづひすな、坊主ぼくしの奥おくで寢ねさして置おいた、ソレく向むふへくる提燈ていとう見付みつけられな早はやふくとせり立たれど、此

年月の悲しさと嬉しさとふじて足立す、杖を力に立兼る、どやせんかたへは脱捨し薦に積りし雪の儘着せて、人目をくらき夜を、ほかく戻る達者親仁、お歸りなされましたか、庄太郎寒い門は何して居る、お歸りが遅い故、お迎ひは出かける所、迎ひは及べぬ、こりや門口の柴の燃さし、非人共が業で有、不用心など見廻す提燈、私がと取拍子のざとばつたり、鹿相だんない、きつい風です、道で取られふと仕た、まだもある所で火が消たど、いふもこたへる疵持足、天氣も大方上り口庭から足ふく下駄直す師匠思ひは機嫌顔、イヤ、馴染程結構な物ない、是から緩りと夜と共に咄そふ、彌最前頼んだ事違變ないの、是はお師匠共覺へぬくどいお尋、心元あふ思し召なら、なまくらでない魂を、只今金打、ア、コレ何のそれ、及ぶ事、及べぬとおつしやつても、お頼なさるゝ本人の、股五郎殿の有家、存じないとおつえやる、お師匠の詞は鞘が有

らんかど存じられ、頼まれるゝ力がないナ。左様玄やござりませぬかと、
探る心の奥々女房稚子抱走り出、コレ親仁殿最前行倒れの順禮が抱て居
た此乳呑子、今肌を明て見れば守りの中ゝ此書付、和州郡山唐木政右衛
門子、已之助と書て有わいの、さど幸兵衛立寄て誠々〱〱よい物が手
ゝ入たぞ、敵の駈を入質ゝ取て置べ此方ゝ六分の強み敵ゝ八分の弱み
有、股五郎殿の運の強さ、其がき随分大事ゝかけ、乳母を取て育るが計畧
の奥の手と悦勇めべ、政右衛門すつと寄て稚子引寄、喉ぶへ貫く小柄の
切先幸兵衛驚き、庄太郎、大事の人質なせ殺した、へ、此駈を留置敵の
鋒先をくじかふと思し召、先生の思案、お年のかげんかこりやちと撚
が戻りました、武士と武士との曠業ゝ、人質取て勝負する比怯者と、後ち
後ち迄人の嘲り笑ひ草、少分ながら股五郎殿の、お力ゝ成此庄太郎、人質
を便りゝ仕らぬ、目ざす相人政右衛門とやら云やつ、其片われの此小

躰、血祭ちまうりは差殺さしころしたたが頼たのまれた拙者せつしやが金打きんでうと死骸がひを庭にわへ、投捨ちひすてたり、幸兵衛手を打う、尤なほ其丈夫たふしひな魂たましひを見届みとどたれば、何をか隠かくそふ股五郎またごろうの奥おくへ來て居るゐいの、祖母ばうむ鐙殿ていを起おこしておじや、コレく股五郎またごろうの片腕かたうでは成頼なりゆきしい人が來たど、いふて爰こゝへ呼よんでおじや、澤井股五郎さわいまたごろう殿だん此内このうちは居ゐさつしやるか、フウシテ外ほかは連つれの衆しゆでもござるかな、イヤく僕わがもなしたつた一人、奥底おくぞこなふ咄はなしてたもと打明うちあけ語るかたと思ふつぽ、何條しれ知たる股五郎またごろう、手取てとするゝ安やすかりなんど、手々ててすね引ひて待大膽まつだいたん、志津馬しづうまの女房にようばうが案内あんないは股五郎またごろうが片腕かたうでとい何なにやつなり共只ひととち一討いちとと鯉口こいぐちくつろげ居合腰氣ゐあいき配はきり目配めはきり互たがひよきつと、こなたい、一度いちどの仰天げうてん、幸兵衛きへいゑむんずと、居直ゐなをり、唐木政からきまさ石衛門いしゑもん和田志津馬わだしづうま不思議ふしぎの對面たいめん満足まんぞくで有あり、先まづがけられし二人ふたりを、思おもひがけなき女房にようばうが心こころどぎまぎ不審ふしん顔がは、老人らうじんの目利めきよもや違ちがひいせまいがの、今宵こんよひ澤井股五郎さわいまたごろうと名乗なをり來る年としはい格好かっこう聞き及およびしとい拔群はつぐんの相さう

違扱へんさくの返かへつて付ねらふ志津馬しづまか、但し餘類よるいの者か、肌敎はだのうさせて詮議せんぎせんと、わざと一ぱい喰くた顔かほ、三寸組板さんすんぐみいた見ぬいたれど我弟子わでしの庄太郎しやうたろうが政右衛門せいゑもんと云事を、知たし漸やうやくたつた今、骨柄こつがらといひ手練しゅれんといひ、適股あつたれ五郎ごらうが片腕うでもせん物と、頼めば早速承知さつそくしやうち仕ながら、股五郎ごごらうが有家ありかを根ねを押おして聞きたがるい心得こころえずと思ひしが、子こを一ひとゑぐり又差殺さころし、立派りつぱ又云放はなした目の内うち、一滴いつてき浮うかむ涙なみだの色いろ隠かくしても隠かくされぬ肉身ごんしんの恩愛おんあい又始はじめてそれと、悟さとりしぞと、澤井さわい又させる恩おんいなければ、娘むすめお袖そでを、城五郎方じやうごらうかたへ奉公ほうこう又遭あうた時筋目ときめ有人あるの娘、末すえく我一家わいけいの、股五郎ごごらうと娶合めあはせん、いかよも頼たのずと、つい云た一言いちごんが、今更引いまさられぬ因果いんぐわの縁えん、其後娘そのちちの奉公ほうこう引ひて歸りしが、今落目おとしめ又成た股五郎ごごらう、見放みはなされぬ侍さむらいの義理ぎり、かくまふ幸兵衛さうべゑねらふ我弟子わでし、悪人あくにん又組くみしてくれと頼たのみ引ひれず、現在げんざい我子わこを一思ひとひ又殺ころした、劔術けんじゆつ無双むさうの政右衛門せいゑもん、手ほどきの此師匠このししやうへの云譚わはさう去さとて、過分くわふんなぞ

や、其志かんも感じ入、敵の肩持片意地かたうちかたいも、最早はや是切只の百姓ひやくしやう、聞人も侍も替らぬ物ものの子の可愛かあいさこそたゞ男のあきらめも有、最前さいぜんちらうと思ひ合す、順禮じゆんれいの、母親の心が察さつしやらるゝと悔くやめ、門かどまたへ兼てわつと泣聲なみこゑ内うちかも明あきか戸直かどなちもまろび入、あへ亡骸なきからを抱いだき上うへ、コレ已すで之助、物云てたもかしや、いのゝ、夕べ迄も今朝けさ迄も、ういつらい其中そのうちもてうち仕たり藝げいづくし、爺おやはよふ似た顔かほ見せて自慢じまんせふと樂たのしんだ物、逢あひと其儘まゝ差殺さころす、むごたらしいと様を恨るゝも恨られぬ、前生さきしやうもどんな罪つみをして侍の子さむらいのこよゝ生れしぞ、こんな事あらさつきの時母ははが死しんだら憂目うれめに見みまい、佛ほとけのお慈悲ひの有あらば今一度いまひと生返かへり乳房ちやうぶを吸すてくれよかしと、庭にはも轉ころびつ這廻はいまわり抱いだきめたる我われが身みも雪ゆきと消きべき風情ふうせいなり、志津馬しづうま涙押拭なみだおしぬぐひ此上この上の包つつまん様さまなし、逆さかもの事ことも眞實しんじつの、敵の有所ありしよを、何なにが扱あつかひ、此方こちらも隠かくしひせぬ、有様ありさまの此幸兵衛さいしやうべゐ、最前さいぜん庄屋しやうゑへ呼よれた時、股五郎またごらうも逢あて來た、ナアすりや

敵ハ庄屋の方、心得たりとかけ出すを、政右衛門引どめ思おもへ、我われも
爰こゝも有あり聞きて、暫時せんじも此地こゝに足を留とどま様がない、はや五六里も行ゆ過すて、も
ふ爰こゝも敵ハ居ゐぬ、此行こゝ先も用心して、海道筋へいよも行ゆまい、道みちをかへて
落おちたと見へる親仁様、何と左様でござらふがな、えたり黒星其通り、迎むかへ
非道ひどうの股五郎、天道の比ひ罰ばつまで、どうで討うたるゝ者なれ共、此岡崎で勝負さ
すれば肩持かたもちねばならぬ幸兵衛藥師堂の山越やまこへ中仙道へ落おした、城五
郎へ一旦いつたんの情股五郎との縁えんも是迄これまで思おもへぬ方便てだてが縁えんも成なり、志津馬殿と言いひ
かへした、娘が身の果はて不便ふびんやと、見れば籬かきの小影かげ方、思おもひ切髪墨染きりかみすみぞめの、けさ
よかへりしそぎ尼姿あますがたお袖そでかき、出かえやつた、悪人あくじんの股五郎こごろうも飯いも女
房にようと名の付ついた、其間違まがへがそなたの不運ふうん、可愛かわいや盛さかりの黒髪くろかみをアコレアコレす、もう何
もゆませぬ、顔おもてへ見ね共云號いひあづけの男持おとこもちのがうるさゝ、屋敷やしきを戻もどつた其
時ときから、尼あまも成氣なるきで袈裟衣けさころも、けふ一日いちにちも氣きが替かわり染違そめちがふたる鍔漿付つげを元の

○第九 伏見の段

男共く、調胸の間へお蒲團ふとんの入いたかな、ど櫃びの間の四人様水菜みづなの爰こゝよ

置おきまする、コレ船頭衆此荷物破物じやぞ、ソレ氣きを付つけて貰もらふと、世話世話を素焼すやきの土産物積つむを早く押出押しだして、舟を見送り、機嫌きげんよふお下りなされとそこく、又夕日程なく吳竹の伏見の里の船着場軒ふかづきばのきをならべし舟宿の客は絶間たぐまもなかりけり、世の憂うれを何と志津馬の爰こゝかして敵かたきの行衛尋ね氣か心氣勞つかれて眼病がんびやうをいたゐる瀬川も諸共もろども又暫しばし爰こゝやどりして、北國屋が奥二階おくにかい、手を引連ひきつれてそろく、梯子はしこを折をりしも黄昏たそがれの人なき隙ひまを幸さいわいと邊あたり見廻みまわし、イヤ志津馬様二階計もお氣詣きぎやうり、月の夜すがの川氣色見やしやんすのが目の養生やうじやうと介抱かいほう如才撫じようさいをでさする、心遣づかひぞわりなけれ、い何なんぼふ養生やうじやうしてもはかしくしうもない眼病、見かけ又替かりなけれ共もけふ此比このころに此様このようふ、そなたの顔さへわかり兼ね、ぶらく月日を過す中主人上杉公急病きうびやうにて御死去遊ごしきよあそされし由、存生ぞんせうの中又敵も討うたぬ殘念、顛ざんねんと思ふ政右衛門殿、武助諸共引別わかれ大坂へござつた故此伏見ふしは逗留どちうす

るも若や敵の、チ、是はしたり、思ひず知ず大きな聲で、コレく誰も聞てゐ居
なんだかと、萱かやも心奥口へ聞へ憚り差寄てひそく咄す店先へ、志津
馬つれも連て孫八が忍ぶ姿の按摩取頭巾すつぽり船着の宿屋くの門口
から、按摩よござい、チ、孫八殿、コレく瀬川泡、去とい物覺への悪い、我等按摩
取の勘兵衛、必鹿相をつしやるなど、云つゝ差寄小聲も成、若旦那のお供
仕て、二三日以前から此伏見は逗留して思ひ付た按摩疔癰、毎日く此
船宿入込で氣を付れどさして是いと申様な手がしりもござりませぬ、
夫いそふと若旦那ちとお目いよふござりまするか、チ、孫八の心遣ひ忘れ
いせぬ某連も此程より歩行いならず、出入の旅人い心を付て競へ共、敵
の行衛知ざる故次第も重る眼病い、口おしさよと計めて打しほるれバ
お道理と、瀬川も涙孫八も俱い目をすり居たりしが、去連いお氣の弱
い、何の神佛様がないよこそ、アレ天道が正直なれば孝行な心が届て、御

本腹も本望も今の中でござりまゑよ、其様も思召の養生の大きな毒や毒の
次手は瀬川様兎角病人は介抱が大事、お如才有まいけれどお若い同士
何よりかよりお持合せの彼毒忌が肝心でござります、ハ、ハ、是から上手
の宿屋を廻つて、後程お見舞やませうと、云つゝ立て表口出るが早く聲
張上按摩、癰、鍼の療治と視隣の八百屋の店奥の間方のかくゝと出る
の櫻田林左衛門、旅勞れで殊の外頭痛がする、幸の導引一つ頼もふか
い、ハ、ハ、左様ならお座敷へ、イヤ、表を見るも又氣ばらし、苦しうない爰で
爰で成程それもよふござりまゑよ、旦那免なされませと庭から直
店の間へ上る、孫八櫻田も互に夫と面體を知ね、何の氣も付す、コレ療
治人、身の随分きついが好遠慮なく揉でくりやれ、サ、ハ、きつう凝てござ
ります、そふしてマア見受ました所がお歴々様、骨組とや丈夫なお産れ、囁
お力も強かるな、兵法とやら劍術とやらも定て抜てござるぞや有な

我達が目もそふ見ゆるに尤、天が下廣しといへ共、某は立合ん者の
恐れなく覺へない、成程左様は見へまする、そふしてあなたのお國の何
國で、どつちへお出あされます、身共の西國方の者成が、智謀劍術勝れ
し故、高木風は倒るゝ習ひと、傍輩の讒によつて浪人して長く、と漂泊
せしが、身共程の達人があらぬに國の弱と有て此度歸參を仰付けられ、
先知の上は過分の加増古郷へ歸る曠の道中、數多有供廻りの別宿は
扣へおれば、跡荷物の揃ひ次第明晝船まで下る積りと、口から出次第潜
上を隣の店は漏聞志津馬、瀬川あれを聞きや、同じ武士の身の上でも、
衰へると盛ふるに是程も違ふ者か心を盡して尋搜す敵の廻り逢
ず、困窮の上此眼病よつく武運は盡たかど、悔は瀬川も、俱涙はんと思へ
ば、あいとしや、沼津でお別れすてよりお跡をえたい尋ね逢かいても長し
い日の立ど、是ぞと思ふ手がしりもないを苦みして此様は、はんは悲し

い病目々、傍で見える目の私が心推量して下さんせとかこち歎くをこな
たよ、聞耳立る櫻田が、兩耳びつしやりテ、コリヤ何とする放さぬかやいテ、
お前様も辛抱のない、斯致して引さげぬバ、お頭痛が直りませぬいハテ
仰山な按摩だあシテ、コリヤ何といふ流じやぞい、是ハ南蠻流の隣の今宮流で
ござります、ハッ聞へたそれで、聾にするのじやな、ハ、ハ、ハ、瀬川、した其様
又案じてたもんな、此宿の亭主が引合せて隣ハ逗留してござる眼醫者
竹中贅宅老の加減の藥湯せん又立て洗てたも、イと云つゝかい立て、勝
手へ入て汲で出る、夫又盡す貞節の心ハ清き清水焼、白湯又振出し差出
せば、始終聞居る林左衛門、詞の五音心得ずと、延上つて差覗くをちやつ
と兩手でめんない千鳥、コリヤハ何とする目が見へぬい、やい、又是も
今宮流か、イエハ、ハ、ハ、斯致して置まして、一時ハ手を放すと、何とお目がはつ
きりと成てよござりましよがな、是を名付て天照太神天の岩戸開きと

やます、何を馬鹿^{ばか}おとを、えたが氣作な按摩^{あんま}取^{シテ}そちが名^な何^{なん}と云^いぞい、
ハ私^わハ板屋勘兵衛とやまして、此間大坂から登^{のぼ}ました、あなたもお下り
なされたら、外を差置^{さしお}芝居へお出なされるで有^あ、面白^{おもしろ}い事でござります、
コレ則^{すなは}爰^{こゝ}又^{また}持^もておりますすが役者の番附、お慰^{なぐさ}まほらうじませ、ウナニ是^{こゝ}が役
者の番附、ハイ大坂土産^{みちのこ}又^{また}何を貰^{もら}たず、役者の番附日傘^{ひがさ}でござります、^調ナニ
日傘^{ひがさ}、日傘^{ひがさ}、そちが仮名^{かめ}ハ板屋^{いた}の勘兵衛、板勘兵衛、ハ、ハ、
是^{こゝ}からお下^{しも}をやりませ、よが横^{よこ}にお成^{なり}なされませぬか、イヤ、下の療治^{りようじ}ハ
後程^{こうじ}頼料^{らいりょう}物^{もの}も一^{いっ}所^{ところ}よくれふ、中^なく氣作^{きさく}な男^{おとこ}め故^{ゆゑ}、長旅^{ながたび}の鬱氣^{うつき}を散^{さん}じた、
さらば是^{こゝ}から夕飯^{ゆふめし}の宿屋^{しゆくや}の知行^{ちぎやう}ハ有^{あり}付^つふ、勘兵衛後^ごもと櫻田^{おうだ}ハ刀引^{はなひき}さ
げ立^た上^あり、一間^{いっけん}へ入^いれ孫^{まご}ハ上^{うへ}の町^{まち}へと急^{いそ}ぎ行^い、道^{みち}摺^{すり}違^{ちが}ふていつこかり、
飛脚^{ひきやく}と見^みへて門口^{もんぐち}から、^調ハイどなたぞ頼^{たの}んませう、是^{こゝ}のお客^{きやく}林新五^{りんしんご}様^{さま}へ大
坂^{おさか}からの此^{こゝ}狀^{じやう}ど、聞^き方^{かた}志津馬^{しづうま}ハ覺^{おぼ}への替名^{かへな}、^調ナニ、是^{こゝ}ハ、則^{すなは}拙^{せつ}者^{しや}林新五^{りんしんご}、直

ぢきよ請取ました、いお返事をなされるなら退付取又参りまゑよと云
捨飛脚の立歸る、瀬川、唐木殿々の此書狀、何事じや讀でたも、早ふく
よ封じめ解、覺束ながら押開く、襖の内々林左衛門、差足拔足表口戸脇よ
隠れて立聞共心付ね、扱も政右衛門様のお氣の付た私でも讀る様
よ仮名交りの此手紙、彌ほ無事と存じ、然れば敵の落足止めん爲
大坂川口の出口く、門弟共數多付置油斷なく手當致し、我等事の武
助諸共尼が崎兵庫の邊りよ待受け間、其地よて替りし事も座い、
早速知らせ下さるべく、此由入度早く以上、政右衛門殿よ、大
坂を立て兵庫の邊りへ参られしか、此方々も委細の譯返書よ委しくや
送らん、瀬川爰の端近奥の間で、太義ながら書てたも飛脚の來ぬ中
早ふ、いと瀬川の夫の手を引連這入後かげ、どつくと窺ひ扱こそく、和
田志津馬よ相違なし、踏込で討放そふか、いかがいせんととつ置つ思

案半へひよつかく一僕さへも内證の薄いを黒める木綿の居士衣、見るから藪井の竹中贅宅療治仕廻ふて戻り足夫と見るが、是は隣座敷のお侍様端近までざりますな、昨晚ちよつとに意得ずた贅宅老、是へくと片脇へ招き寄て聲をひそめ今朝もすこくと隣家まで逗留致して居る若侍が、眼病、貴殿が療治召るゝと付折入て頼し密事彌々承知下さるゝやイヤモ大身のあきた様のお頼、お禮物さへ慥あらば、先の過分、然らば打明お咄し、子細有て某始め、別宿まで逗留致す、組の者共へ仇有やつと、夜前か心を付るゝ、身共が推量ちつ共違はず、彼が實名知たる上、討て捨んと思へ共、彼者も方を添る劍術無双の曲者有故我くが手よかくる時、返て、此身の有所も知、帶紐解て夜が寐れず、サ頼と云の爰の事、何卒貴公の働きまで毒藥を藥と偽り、さやつが眼の見へぬ様よ何と手段の有まいか、此事成就致しなば一廉お禮を仕らふ、先頼の印

ど懷中々、金子の包取出し些少ながらと手又渡せバ、金子五十兩、結
搦な、お印しやな隣の病人治したとて高く貳朱かよふかれて百正の
覺束ない、ほんの是が牛を馬又乗かへたと、中物、後共云すたつた今、我等
が秘方の毒藥を差が相圖又兩眼々、五臟へ染込、腐り藥、ちやくと用意致
して置た、刀いらす又仕廻ふて取り、此贅宅か手の中又有、早速の得
心満足致た、必手ぬかりなき様、お氣遣ひなされすな生す覺
いなければ共殺す事なら、こちが得物、委細いあれから、覽じませ、いか
もよきと打點頭、えめし合して店の間の障子、引立、窺ふ、櫻田、何でも
めたと贅宅が、物又懸りの掴み、頬上へ見せぬ、塗骨の、扇、ぱち、隣の
店、贅宅でござる、は、見舞、す、と聲、又志津馬、一間を出、是、は、苦勞千
方、扱お歸りを待兼ました、そふでござる、晝から、お見舞、中、筈が、存
じの流行醫者あそこからも竹中、爰からも贅宅様、生藥師じやと持囃し

て、漸よう只今罷歸まかりかへつた何と晝あちの洗あらひ藥で、さつぱりとよからうがの、イヤさして替かわつた事も、うめんよふな、う藥でよい筈はずじやが、ドレ今一度見みて進すすぜふど、行燈あんどん引寄ひきよ灯よせ明あかりよ、ためつすがめつすかし見て、コリヤ内障そとひたち立たちじやないの、是なら洗藥あらひぐすりで、コリヤ行ぬ筈、取おきて置おきの差藥さしを、出でさする成なるまい、コレ大切な藥じや程ほどもうつかりと思おもしやんぢや、氣遣きづかひ召めるな、今の間ま又本腹ほんぐくさして進すすせふと、こて／＼取出とす藥箱ばと、是このよいお方かたよ、かゝり合あひして拙者しよが仕合しあせ、此お禮れいの本望ほんぼうを、コリヤ退付たいふ本腹ほんぐく致いたしたら急度きうど致いたすでござりまゑよ、ハチ心遣こころづかひさつしやるな、醫道いどうの仁術じんじゆつ人を救すくふる醫者いしやの役やくぢや、サアもそつとこちへ寄よつしやれど、片手かたて又壓おさ押おし明みて、救きうふる件くだんの毒藥どくやくの、直ただ志津馬しづまが命いのちを斷たじの刃金はがねの差藥さし、忽たち毒氣どくき廻まわると見みへる、コリヤきつふ此目ここのめが、痛いた筈はずぢや、むかえゆむで有あがの、少しの間まぢやこらへさつしやれ藥くすりめんけんせざる時ときの、其病そのび治ちせずとやて、一旦動うごかねば藥くすりのきかぬ退付たいふ兩眼りやうがん明みらかよ

此生藥師が治して進せる、^レ其間一ぶく致さふと、煙管取上すつばく、
すつばのこつてう、納た頼付、志津馬の苦痛たへがたく、^同は是迄のは
藥とい違ふて、五臓迄も染渡り、いかふ苦しうござりますと、聲は瀬川も
走り出、若お藥の違ひはせぬか、お心慥は持ちやんせと一方ならぬ介抱
ふ、じろりと詠、^同うつり共め、今藥じやといふて差たのは、我が目を潰さ
ふ計、おれが秘方の毒藥じやいやい、^ヤくそんなら今の毒で有たか、何
意趣有て此仕業、^同様子が有ふ、様子にと、立上れ共よろ、^同瀬川とこ
ゝ居やる、瀬川爰が苦しい、^同せつないはいのと夫の惱を見る悲しさ。
有ふもあられず、縫り付、^同そんならお目かもふ見へぬか、^ハイ胴欲醫者の鬼
め、魔王め、^同すた、^同ゝゝゝ刻でも恨のはれぬとまがみ付、小腕取て、膝は引敷
ゝゝゝと、^同と刻廻ても、もふ叶ぬ、^同ヤ隣のお客、何と拙者が、^同加減
を、^同とくど是よて見届たりと、物影を林左衛門あたり顔は歩み出、^同和田

行家が駈同苗志津馬、無念も有ふな。某を和田志津馬と知た。こなたの
澤井股五郎も力を添る。伯父の櫻田林左衛門、其方連が股五郎を討ん
などし、及ばぬ事と聞か、扱ひと這寄く、敵の片われ遁さじと、刀の柄
も手をかくるを襟がみ搦んでぐつと捻付、劔術無双の此櫻田も刀向
んとこのさかしい蚊とんぼ侍捻り殺す。安けれど、某始め、股五郎が
有家を知れて、一大事と、贅宅も申合せし身が計畧眼も見へぬ分際で
も、見事親の敵を討か、相人の大敵其上も、城五郎殿のお心付みて、劔術勝
れし侍數多付添ふ股五郎、所詮叶ひぬ事だとあきらめ、首でもくくつて
くだバれど、惡口雜言脚もかけ、踏付られて無念の齒ざり、侍の有まじ
い、比怯未鍊の此仕業、親の敵の股五郎も縁を引たる其方が、土足もかけ
られ手向もならぬ。此目が見へぬから、口惜や無念やと拳を握り男
泣、見るも瀬川が氣に狂亂、目かいても見へぬ、志津馬様もむごいつらい大

悪人天道様の明らかな、お目よ、是がかしらぬか、孫八殿（調）何してぞ、神も佛も恨（うらめ）しやと聲を限り泣（な）叫（さけ）ぶ、やかましいわい、眼（コリヤ）の見へぬ計じやない、毒氣（いどき）が五臓へ廻るが最期（さいご）追付（おっつけ）ころり百兩の褒美がはしさの仕事じやわい、やい、贅宅が働きよて、此志津馬めを仕廻ふて取、待伏ひろぐ政右衛門め、鼻明すのがこつちの方便（たて）、荷物の内よ忍ませ置し、股五郎（ももごろう）も落付（おちつか）せ、うぬらが苦痛を看（み）よして一献（いっけん）汲（く）ふ、いよいよさまと踏（ふみ）飛（と）し、かけ行鎧（こじり）をえつかと取（と）ずりや差敵（さすてき）の股五郎（ももごろう）、身共と一所よ昨日は是よ逗留（どちりう）致し居る（を）い、忝（はづ）い、今こそ敵の有所が知（し）れた、志津馬様、嘸（ま）本望とぬつと出る池添孫八、主従一度よ身繕（つくろ）ふ、ヤア、コリヤ、儂眼（おのれ）が見へるな、贅宅こりやどふじややい、目醫者と成て入込（いりこみ）し、此贅宅が本名（ほんな）の、孫八が兄池添孫六、志津馬様と云合せ明（あき）らかな兩眼を目病（めび）と偽り儂（おのれ）が俗性敵（せうてき）の行衛（しん）を知（し）ん爲、首尾（しゅび）よふ参つた櫻田殿と云れて恟（びく）り、股五郎（ももごろう）

を見出さん爲云合せで有たよな此上の一味の者へ告知せんとかけ出る敵のかとふ人逃さじと拔手も見せず主従が勵しき手練の働さよ、さしもの櫻田叶いじと旅宿をさして逃込だり、ヤいづく迄もと孫八志津馬、欠入んとする奥の間々、どつこいならぬと呉服屋十兵衛、かけ隔てささゆるを血氣の志津馬が切先よ、肩先すつぱり切下られうんど倒るゝ共隙よ奥を目かけて欠入を、斬くと聲をかけ濱邊よつなぎし苦舟、船装束を其儘よ、武介引連政右衛門、えづくど歩み出、手よ入た敵なれ共、爰でい討れぬ子細有、町人ながら義心有十兵衛が此深手非道よ組せし先非を悔志津馬が手よかりし、本望あらんと有ければ、手負ひむつくと起上り、推量の上い我所存、今更くどくやよ及ばず、股五郎始め一味の者共、西國へ落失てい本望の妨と、政右工門様の計略よて最前の似せ飛脚を、誠と心得裏道々、小倉堤を伊賀越よ、志州島羽の港々、

大廻しゝて九州相良へ、落失んとの云合をお知せずて相果るが、志津馬
様へのせめての寸志、町人なれ共、敵の端くれ、股五郎も頼れた、一つの命
を兩方へ、わけて願ひの此上ながら、瀬川が事の政右衛門が、刀よかけ
て志津馬も添す、武士の鑑の政右衛門様、其は一言の呉服屋が冥途の
晴着、片時も早くぼつ付て、此年月のは本望はやくと氣をいらつ、
手負も取付妹が、歎くを制して政右衛門、いかにもぼつ付討留んの我
掌の内も有と、志津馬が亡君上杉殿の、は家門たる畠山、政家公がすへ置
れし、宇内公の石碑有伊賀路もゐて本望達する物ならべ、泉下もまし
ます、顯定公、行家殿への追善ならん譬何百何十人彼も力を添る共、天理
も背敵の介太刀何條恐るゝ事有じ、時の初更の戌の刻、先へ廻つて伊賀
越も、多年の本望今此時と唐木が諫も力足、手負を跡も三つ瀬川、三途の
瀬もみゝ敵の魁さらば、を夜嵐も聲吹分る海道筋跡を、またふて、一急

ぎ行

○第十 敵討の段

されば唐木政右衛門股五郎を付出し、夜を日と繼で伏見を出伊賀の上野と心ざし、先へ廻りて代官所の届けも濟て北谷の四つ辻と主従四人我劣らじと入来る、政右衛門聲をかけ孫八武助の我と構はず志津馬をかこい、我兼て聞及ぶ、股五郎の付人有由、目さす敵の只一人、警助太刀何十人有逆も、何程の事あらん最早来る間も有まじ、身拵へをとせいすれば、志津馬のけふを一世の晴業、心得たりと片はだ拔け、南蠻鎧の差込と鎖り鉢巻拜領の不動國行覺への名作、同唐木も立附と澁の鉢巻信國のねた刃の兼て合詞、いづれ劣らぬ古今の勇士池添石留引添て、日頃の念願さす敵を今や來ると、待かけたり、程も有せず、股五郎惡黨原より前後をかこいせ、一番手の林左衛門、さゝめき渡り我一と、小田町筋へと打

遁る、斯と見る、和田志津馬小影を飛で出、向ふと立て大音上、いか
澤井股五郎、汝が手まかけし和田行家か一子同苗志津馬、此所と待受た
り、尋常と勝負せよと聲かくれば、政右衛門、久しや櫻田林左衛門、郡山
まで真劍の勝負を望し、其方今日に至つたり、覺悟せよと呼つたり、心
得たりと林左衛門馬上を飛下るを走りかゝつて、政右衛門、豁々肩先か
けて切付たり、遁など聲と、一流を得し附人共志津馬を目當切かく
る、心得たりと池添石留四人を相手と切結ぶ、股五郎志津馬の一騎打兼
て手練の和田志津馬、爰と顯れ、彼所と切拔飛鳥の如き早業と、股五郎も
あしらい兼突かける鎗先を、鏢せりと請留られ、跡退りと成てたぢく
たぢ、坂の下へと引て行、この心へすと團四郎、股五郎を救はんと勢ひ込
でかけ行所へ、どつこいやらぬと政右衛門、仁王立とつゝ立たり、邪魔
障ろぐなと打かくる、心得たりと、受流し付込所を身をひらき飛よと見

へしが團四郎、から竹割たけわりも切伏たり、返す刀も助太刀共一人も残のこらずす
くい切きり志津馬が身の上氣遣しと、二人の家來を跡あとまなし坂の下へと飛
で行、孫八武助の死物狂ものぐるひ、殘多あまたの付人相人つきどうじんも取切つ切れつ戦たたかひしが、數
ヶ所の手疵てきずも目も眩くらみ同じ枕まくらも死してけり、股五郎相人またごろうどうじんも和田志津馬
手利てきと手利てきの晴勝負はれしやうぶ、いづれ抜目ぬけめのあき所へ政右衛門が韋駄いだ天走てんそうり、助
太刀の奴原やつばらは一人も残らず討留うちどめしぞ残るのこるそやつ只一人ひとり、踏込ふみこんて討
留どめいと聲の助太刀百人力ひゃくにんりきよろめく所を付入つけいれて、肩先かたさきざつぷと切付たり
こは叶かはじと股五郎死物狂しにものぐるいと働はたらけ共、動どうぜぬ武士の太刀風たちかぜも、さしも
の澤井さわいも切立きたちられ、まどろみ成なるを疊たたみかけ、尖すさき一刀、大地へとつさり、起おこし
も立たず乗のりかゝり、年來としきの父の敵身しんの敵、主人の仇あだ一度も晴はれる胸むねの月つき、空そらも
知れし上杉の家うへすぎのいえの譽はなれと悦よろこぶ唐木からぎ、武名ぶめいの世々よよも鳴なひ、く、和田が手疵てきず
も目を退まうて願ねがて全部ぜんぶ十冊物じふさふ此上こゝもなき敵討てきうち今も譽はなれを残のこしける

天明三癸卯年四月廿七日

伊賀越道中雙六終

伊賀越

明治廿四年十月七日印刷
明治廿四年十月九日出版

翻刻兼
發行者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發兌

日本橋區通四丁目四番地

金櫻堂